
BAD WORK2

ヤシマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B A D W O R K 2

【Nコード】

N 0 8 2 9 J

【作者名】

ヤシマ

【あらすじ】

その島は今日も変わらず、そこにあった。

何事も、島があり続ける限り小さなこと。

そう思わせるかのように、あの事件は忘れかけられ、しばしの安息が人々に与えられた。

しかし、彼らには再度災厄が降りかかろうといていた。

とある依頼から、詩焉は再び事件に巻き込まれる。

ブローグ

名前のない島。

ないからこそ、現代の島という意味の代表的な存在。それがこの島だ。

現在は政府が行政をあきらめ、力が秩序の多国籍の犯罪者組織などの無法地帯、悪の総本山となっている。

といっても、特別生活環境が悪いわけでもない。

ガスや電気の基本ライフラインはそこの先進国並みに普及しているし、島が諦められる前から住んでいる一般住人も十分安全に生活できている。

確かに、いろんな悪が島にはある。人もゴミのように殺されている。不当な取引も日々行われている。子供がいたぶられている。人権なんて、一部の金持ちぐらいにしかないだろう。

それでも、この島で生まれたり、捨てられたりしたならば、この島で生きていくしかない。

新しい身分証明書が発行され、いつそう偽装が難しくなった今。島の外に出て身分を証明するもがなければ仕事も出来ない。家にも住めない。

だからここに居るしかない。ここで生き残らないといけない。

自分の人生のビックイベントのなかで5本の指に入るほどの大事件が先月あった。

直接手を下したわけではないが、間接的に会社一つが島から消えてしまった。それでも、島全体に与える影響としては微塵も感じさせない程度のものだろう。

そして、大切な仲間が増えた。

俺の周りはどうどん変わっていくのに、俺はいつまで経っても変わらない。

だからだろう。だから、いつも通り必死に走っているんだろう。

まだ、肌寒さが十分に残る2月下旬なのに、ここ一週間は夏のように暑い。

今日は、三月に頼まれた仕事でラーメン屋、白龍に小荷物を届けることになっていた。

三月の店からなら歩いておよそ2時間半。

ちよつと前まではあったのだが、盗難にあい、現在バイクなど乗る物のない俺は仕方なく日々の運動がてら軽く走っていくつもりだった。

時間厳守と書かれたそれをもって十分間に合うように約束の時間の4時間前から店を出だ。

なのに、なのに、現在現力疾走で白龍に向っている。

あまりの暑さのため、荷物の奥からTシャツなどの夏物を取り出し、いつもの黒いコートを脱ぎいつものように長い髪を結んだ、その少年は思わず叫ぶ。

「どうして、こんなに通行止めが多いんだ。」

軽く走るつもりだったので、1時間半ほどで着く予定だったのに現在出発してから、3時間40分。

白龍に繋がる道のほとんどが、自衛団と呼ばれたり自治団と呼ばれたりしている組織や暴力団まで、幹部の支配下にある組織が通行止めをしていた。

その通行止めの奥では、必死に修理作業が行われているのをさつき見たので軽く予想する。

はじめに出た答えが、島の権力の3つのうちのどれかを奪い取るた

め。これは十分に考えられる。

現に今も、外から色々な組織が隙あらばその座を奪い取ろうとしている。しかし、作業されている所を見たり聞いたりしていると島全体ということなので、これはボツ。

いつそ島全体に対するテロ行為と取った方が話が早いと結論をまとめ、帰ったら三月に聞いてみよう、人任せで終わらせる。

その角を曲がればどうにか間に合う。

スピードを殺さないまま角を曲がると見慣れた・・・見慣れたスーツ姿の男達が人払いを行っている。

ここもか。正直もうだめだ。道はもう無い。ふと辺りを見回す。作業が行われているのは、この道全体で、この道を曲がった先は作業が行われていない。

そして、道にそって聳え立つアパート。

やることは決まった。

全力でアパートへ行き、2階の部屋があるところへ上る。そして、手短なドアに手をかけ開ける。しかし、カギが掛かっているらしく、いくら引いても開かない。

「だあー、つくそ。」

バックからハンマーのような、破壊目的専門の道具を取り出しドアノブを思いつき叩く。

幸いボロやだったので、ドアノブは叩いた勢いそのまま飛び、下へと落ちたがそんなことは気にしない。

住んでいる若い男と女がなにか騒ぐ。男の方が近寄ってくるが、本当にすまないと思いつつ、殴って黙らせ、そのまま奥の窓へ向い、そこから外へ飛び出す。

着地した瞬間膝を折り、その威力に逆らわないように地面を転がり、時計を見て走り出す。

残り10分。

どうにか、間に合う。心のどこかで安息を付く。

ふと、脇道を見ると外国人が集まってなにかしているようだったが、

一瞬だったのでよく分からなかった。再び前を見て走るペースをあげる頃にはさっきの光景を頭の中から消していた。

島が季節外れの天候にみまわれる3日前の中東。

そこは、先進国の無茶な需要のため、いつも通り鉱物資源を狙うゲリラとの紛争が行われていた。

これが日常茶飯事かと言うように、子供や大人は銃を取り戦場へ行き、戦うことが出来ない子供や女、老人はそそくさと隠れる。

飲み水は汚れ、それでも飲まなくてはいけなくなり、多くの人が感染症になる。

食べるものはなく、何日も何日も食べられない時期があり、幼い子供はそれで命を落してしまう。

服は汚れ、穴が開き異臭を放つても着続けなければならない。

家はつぶれ、何も無い空の下で夜を過ごすことも数え切れずある。

俺は思う。ここが世界でもっとも環境が悪い場所だと。

前耳にした、島なんかよりよっぽど悪い。

そんな中に俺はいる。

あたりを見渡せば、鉱物を狙う意地汚いゲリラに金で雇われた同業者などなど。

俺見たいな奴等がゴロゴロいる。

そして、その数戦う理由はある。

生まれたときから、戦うことを決められていた奴。

戦わないと明日家族へ食べさせるものが買えない奴。

生きるために戦う奴。

自分の崇める神の為に戦う奴。

ただ純粹に殺しを楽しみたい奴。

そんな中、俺の戦う理由は生きるためだ。

理由は簡単。

こんな辺鄙な土地に捨てられた俺は、拾われてそして戦うことを学

ばなければならなかった。

いくつかの戦場を回っていたとき誰かが俺のことを日本人と言ってくれるまで、自分はその土地の人かその辺だとずっと思っていた。言われてみれば、確かに俺の顔つきは他の皆とは違っていたが、生死の境でそんなことを気にしていられなかったから、教えてくれたその時まで気付けなかった。

そして、大人たちが教えてくれたことは、勢いで生んでしまった子供をここに捨てに来る日本人はたくさんいると言うことだ。

正直こんな所に捨てれば自分達の子供は決して帰ってくることも無く、誘拐された、紛争に巻き込まれたなど良いわけはし放題な訳である。

そういうわけで俺はここに居る。

たまに、会った奴等が俺に聞く。

親を憎んでいるか？と。

だいたい、こういうところに来るとそんなことばかり聞かれるので、俺の返事は、

「別に」の一言で終わらせる。

いつも通りそういうと、つまらないのか、興味をなくし自分の得物の手入れを行うために戻った。

それを見た俺も、銃の手入れを行う。

AK。安値かつ安定した性能からこの紛争でよくまわっている主流の武器だ。

そして、ドラグノフ狙撃銃。

こんな荒れ果てた所ではまともな整備は出来ないので、性能は他に比べほんの少し低いが丈夫なものの方があっているのだ。

適当にチェックを済ますと、ゲリラ部隊の指揮官が出発を合図する。

それに各々は従い。

輸送車へ乗り、尽きることの無い欲望の為に尽きかけている資源を奪いへ行く。

営業前のぱっパの奥。

そこは、ウィルシア・三月のもうひとつの仕事場であった。朝か夜かすら、判断が付かないその部屋で彼女は延々とパソコンのディスプレイと携帯片手に仕事をしていた。

時にはキーボード一つで相手会社の秘密を曝し、時には大金を動かす。

そして、時にはこの島の全てを見る。

「……ごころうさまで。……ええ、お互い今後ともいい関係を築いていきましょう。……それでは。」

これで、最後と思われる電話を切り、ずれ落ちたメガネをかけ直し、ようやく一息つくために怜火ひとりで準備をしている店へと足を向ける。

「ご、ご苦労様です。」

とある事件以来、この店で働いている怜火が初々しいエプロン姿で店の方から、コーヒーを持ってきてくれる。

ありがとう、と言ってコーヒーを受け取りそのままソファに深く腰掛ける。

しかし、電話やメールのやり取りを思い出し、美味しいはずのコーヒーの味すらひっくり返る。

「今回は一段と……どうかしたんですか？」

怜火が心配そうに話しかける。

彼女がこの店に泊り込みで働くようになってからも、たびたび徹夜の情報収集を行ったことがあるが、それでも今日ほど疲れた姿をみせたことは無かった。

ここは彼女に素直に話すか迷う所であるのだが、あまりの疲労のためそれを忘れて、優しさに縋ってしまう。

「久しぶりに島が荒れるらしいから。れーちゃんも気をつけてね。その、なんていうかここ最近比較的に爆破事件が多かったでしょ。」

あちらこちらでの爆発事件のテロリスト達が、警告は既に終わったとか言って本気で仕掛けてくるらしいから。」

食器やテーブルを拭く彼女の手が止まる。

普段はこういう事件を聞くだけでも、恐怖の表情と言いか、行動を隠せない。

しかし、そんな彼女でも、戦場に出れば別らしい。らしいのだ。

彼女の卓越した情報網でも、彼女の過去の情報はほとんど手に入っておらず、最近のある出来事から彼女の正体を予測するしかなかった。

「大丈夫だよ、れーちゃん。それと、詩焉に連絡してくれない？もうひとつ厄介なことがあって。」

詩焉の仕事内容と、今回起きている爆破事件の微妙かつ奇跡的なつながりについては現在も捜査中で、まだ確実な情報は得られていない。

それでも、自分の情報網の強化のきっかけと、詩焉の安全のどちらか一方だけを選ぶことが出来ず、前回と同じようなことをしようとしている自分に腹が立つ。

「また、あいつに頼るのか。」

口に出そうと思ってもいなかったのに、ふと、声がこぼれる。

電話をしている怜火には聞こえなかっただろう。

少し安心しながら、自分がどれほど弱っているかようやく自覚できた。

それでも体に鞭打ってこれから来る客の為にカウンターへ立つ。

「さあ気合入れないとね。」

積み上げられた砂袋は見方によっては一種の芸術に見れるほどに所々積みまわっていた。

深く掘られた堀は、地上絵のような存在感を出しているが、どちら

も上空から見たものはいない。

見上げようものなら、RPGや対物ライフルで打ち落とされてしま
うからである。

そして、迷路とも見れるその中で、ゲリラ対正規軍の紛争がいつ頃
だろうか、覚えていないがとにかく続けられてきている。

そんな中、一人だけ浮いしまっているのが俺、アリ・ハルトだ。

親に捨てられ運良くここまで生き延び、仕方なく生きるために戦う
ことを選んだ。

他人から奪わなければ生きていけないこの世の法則を目にしたんだ。

当然の選択だ。

これまでに、何百の戦場を渡ってきたが、日本人の顔はどの戦場で
も当たり前のように浮いていた。

それでも、最近は20を越えていない同世代の子供が増えたおかげ
でどうにか、場の雰囲気になじめるようになってきた。

しかし、こんな環境に何十年もいるのに、俺の第一印象は未だに優
男だと皆から言われ、会う人皆に下に見られる。

輸送車から降りると、各小隊に分かれ作戦通り散らばったが、仲間
がどうなったなんて知らない。

通信兵がいるわけでもないのに、作戦を決めたら後は個人でそれを
実行するだけだ。

そんなだから、いつまで経っても勝てない、不利な消耗戦を続けな
いといけないんだ。

まあ、今回の作戦は今までに比べたら大分吹っ飛んでるのは言わな
くてもいいだろう。

大量のプラスチック爆弾を、正規軍の物資保管庫や戦車などに設置
し、爆破する。

単純明快。もう作戦と呼べる物ではなかった。

いかにも、いっぱつきめて、頭が良い感じに出来上がった奴
等の考える作戦だ。

金があれば何でもできると思ってる。何でも吹っ飛ばせる爆弾があれば戦争に勝てると勘違いしてやがる。さらに、たちが悪いのは、間違っていることをだれも奴等に言わないことだ。

金を持つてる奴の事を褒めれば、協賛すれば、肯定すれば、金が自分の所に回ってくると、分かっちゃまった奴等がまた金持ちになる。そうしてこのレアメタルをめぐった紛争は続く。

本当にたちが悪い。

そして、そんな無茶振りの作戦を成功させるために必死になる自分も正直やつてられない。

「おい、お前。先行しろ。」

ふと、苛立った声がする。

顔を上げれば、そこには小奇麗な小隊長の憎たらしい面があった。

「ふざけるな。どうしてもいきたきや自分で行け。」

「残念だが、安全な所にいられるのは上司の特権だ。さあ行け。」

反吐が出る。まあ他の奴等にも銃を向けられれば仕方なく行くしかないのだが、銃弾が飛び交う中、砂袋と砂袋をわたるのは楽な事じゃない。

まして、荷物だってあるんだ。

愚痴を言っても聞いてくれる奴はもういないので、必死に走る。

そうすると、痺れを切らしたあちらさんがRPGを取り出すのが、俺の位置からならはつきりと見える。

このままだと、狙われるのはさつきまで俺がいた小隊の位置か。

仕方が無い。

そう思った頃には、5名の隊員の命は天への片道切符を手にしながら、ゆっくりと空を上っていた。

後ろからのサポートをなくした俺は、その場から動けなくなり、爆破時間までまたなければならなかった。

待つこと、10分。

本来ならとつくに爆発している頃なんだが、一向に爆破の気配がない。

仕方なく、手短のものに隠れながら、必死に保管庫へ向う。

「どうして、爆破しないんだ。失敗したのか？」

その場にいたゲリラ兵に話しかけると、あたりをキョロキョロと不自然に見渡し銃を構える。

そして、突然銃口をこちらに構え引き金に力を入れようとする。

が、しかし、銃口が自分に向けられる前に銃口を掴んで上にそらし、空いた左手で腰から拳銃を取り出し左の太ももに一発ずつ打ち込む。

叫び転がるが、すかさず相手の肩を踏み今度はひだ右肩に一発銃弾を打ち込み相手を戦闘不能状態にする。

ひと段落着いたところで状況を整理する。

裏切り・・・つまり勝機を完全に諦めた奴等が、正規軍に尻尾を振ったわけと？

「時間厳守たあさすがだな。残り時間ギリギリだ。」

開店前の白龍の店内。決して広々としているわけではないが、その店内は必要なものだけで作られ、性能が重視されていることがよく分かる。そして、その分広々としている。

そして、暑いがために、なぜかしら熱い物を食べに来る人が多く、ここ連日は大反響のラーメン屋である。

それ故普段取り揃えない間隔で食品を取り揃えなくてはならなかった。

もし、その材料にこだわりが無ければ、そこらの店で取り揃えれば良いのだが、この店の主人李・龍園^{リ・リョウエン}は材料にこだわりの持っていた。

この島にある店について少しだけ話すとしたら店を設けている人には2種類の人がいると言うことだ。

まず、粗悪品でも何でも、売らなければ生活できない人たち。

そして、こんな場所だからこそ味で勝負する、純粹に自分の腕を磨

きに来た人たち。

そして、龍園はもちろん後者である。

だから、特別なルートを使わなければ急遽用意できない材料があったのだ。

「仕方ないじゃないですか、龍さん。最近爆破事件ばかりで、こちらの道全部ふさがってたんですから。」

「そこを、考えて行動するのが、プロだろ。」

運び屋と言っわけではないが、いちおこういう仕事をしている限り、しっかりと時間や契約内容を守らないといけないわけであって、反論する余地は無い。

「ほう、詩焉はさっさと汗拭いテ。龍は、仕込みを終わらせテ。」

そう言って、まだ日本語を習って日が浅いキヤイナドレスを着た白龍の看板娘円・白桃えん・はくとうがタオルを投げてくれる。

と、言っても顔面に向けてタオルを全力で投げ当てられた。

思わず座っていたイスから倒れるが、向こうでは龍さんが蹴られたような鈍い音が鳴る。

「白さんしろさん、いちお商売相手なんだけど。」

苦し紛れに絞りだした声は、鋭く澄んだナイフのような声に潰される。

「商売相手つてのハ、ウチのラーメンを食べてくれルやつ的事ダ。

まあ一品ぐらい食わしてやるカラ、そんなに騒ぐナ。」

「店も開けるから、そこに座つてろ。」

奥から龍さんが、支度を済ませ調理をはじめ、白さんは店に暖簾をかける。

それと同時に、客がぞろぞろと店に足を入れる。

ラーメン屋というので、俺の認識では日本人などのアジア系が多いと思えば、アメリカ系や中東系の人が多かった。

「白さん、ここってああいふ外国の方に人気なの？」

せつせと水を運び、忙しそうに店を駆け回っている彼女から見れば良い迷惑だが、無視することも出来ずに、素直に聞いてくれた。

「いや、いつも八、におんじんが多いけど今日は特別。」

注文は今いる客の中で一番最後になりそうとのことを聞き、水を貰う。

そうして、暇を潰すために相手に不快な思いをさせない程度に店内を見回す。

何を話しているのか言葉が分からないため理解することが出来ないが、明らかに食事をするために入ってきたわけではない、中東系の人たちのグループに耳を向ける。

中には日本人やヨーロッパ系もいるが誰もがだぶんウルドゥー語？だろう、俺が知らない範囲の語源を扱いまわりに聞かれても大丈夫なように対策している。

嫌な雰囲気だ。

直感がそう伝える。

店が荒れると思った瞬間、客達が騒ぎ始めた。

喧嘩か。少し嫌な予想と違ったが、嫌なことには違いない。

関わらないようトイレの方へと寄るが白さんに呼び止められてしまう。

「龍が、止めたラ炒飯追加だとヨ。」

「餃子も追加なら。」

額に手を当てて少し考える。

正直白さんが出てけばその美貌を傷つけんと、皆喧嘩をやめるだろうと思うけど。

そんな事、口が裂けても龍さんと本人の前ではいえないので、餃子と引き換える。

「ヨシ、行ってこい。」

親指を立てて、これでもかってほどの無表情で人を送り出す。

「せめて、笑顔で送り出してくれば良いものを。さて。」

まず、近くで揉み合っている片方を殴り飛ばす。

そのもう片方へ向けて笑顔でハイタッチを求めると、俺を味方と勘違いして笑顔でハイタッチを返そうとするが、隙を見て顔面に決め

る。

軽く手を振り痛みを逃す。

新たな敵を見つけて目を輝かせながら一人が迫ってくる。

思いつきり体重を乗せた一撃を受け流すがごとく背負い投げでテールに叩きつける。

3人目。

喧嘩していたのは、始めに目をつけたグループ5人と、別のどうみても堅気じゃない日本人グループ4人。

残りは6人。

手元にある割り箸で刺してこようとする奴の手を手元にあつた灰皿で払いのける。

残り5人と思いきや、既に3人はそれぞれの戦いで倒れているので立っているのは、お互い一人一人らしく、どうやらこれで最後らしい。

漁夫の利を狙って勝負が付くのを待つ。

やっさんの方が懐に隠していた小刀を取り出す。

「てめえ、ぶっ殺してやる。」

もう一人の方も、何か騒ぐか言葉分らないので、何とも出来ない。

何を言っているのかは、分からないが、何をするのかは分かった。

軽く羽織っている上着の中に隠してあつた女性用の小型の拳銃を取り出す。

目が血走ってかなり興奮している時点で、引き金を引くのは分かったが、こんな状況じゃこっちに向ってうってくるかもしれないので、引き金を引く前に止めに入る。

さっきの灰皿を投げるが手に当らずそのまま壁へぶつかり、壁をへこませそのまま床に転がる。

しかし、相手の意識をこちらに向けることは成功した。

一気に距離をつめ、相手が振り向いた時拳銃を持っている手を掴み下へ向ける。

2、3発撃ったが、誰にもあたらず床に傷をつけるだけとなる。

顔面に肘打ちを喰らわそうとしてくるが、かわして空いた顎にアッパーカットを当てる。

手袋などがないと、思いつきり殴れば殴るほど痛いのだが、殴ってから反省しても仕方ない。

「あんたも助かったな。」

抜き身の刀をぶら下げたまま愕然とその場に立ち尽くす。

「余計な事しやがってよお。くそがきがあ。」

やり場の無い怒りはもつとも近くに居た俺に向ってきた。理不尽なまでに。

「つぐあ。」

しかし、その怒りは俺に届く前に、この店の看板娘の一撃によって粉碎される。

銀色に光り輝くトレイを持ち、倒れた男の後ろにその人は立つ。

完全に良いところ取りだが、助かったのでよしとする。

「良いところ取りですか。」

「頭危ないゾ。」

会話のキャッチボールが成立していません。そう思ったが、振りかぶってトレイを投げようとしている姿を見てすぐさま床に伏せる。

後ろでトレイが人に当たった鈍い音と床に響く金属音、そして人が倒れる音がした。

「気を抜くナ。こんナ、チンピラの喧嘩場でも、戦場八戦場だ。義久ニ何ヲ教わつタ。」

トレイの当たった奴の顔面、鼻は無残にも折れ曲がっており、痛々しい鼻血が床を真っ赤に染めている。

フン、と鼻を鳴らし、腕を組みながら倒れた者の上に仁王立ちをするその姿はまさしく戦女神。

始めっからあんたが行けばよかったんじゃないですか？

「白^{ぱい}終わったか。それにしても、もう少し綺麗にできねえのかよ。」

まあそれはそいつ等に弁償してもらうからよしとするか。ほら、詩焉用意できるからさつさとすませ。」

白さんとは日本に一緒に来たのに、えらく流暢な日本語を龍さんは話すが今はそんな事どうでもいい。

気絶してる奴等や、痛みで身動き取れない人を縛り上げる。

自衛団の人たちが来るまで、ここで大人しくしてもらったためだ。縛るついでに、1人の懐から財布を取り出す。

一人だけということなので、最後に拳銃を出した奴から財布を頂戴する。それと一緒に大事に隠してある、なにかの機械も拝借する。

「後は良いカラ、冷めなうちにいけ。」

ありがとうといってカウンターでラーメンと炒飯と餃子をいつきにたいたげる。

「もう少し味わってくればいいんだがなあ。そんなにがつつくなくよ。」

「久しぶりのまともな食事なんですよ。それに、自治団さんのこと少し苦手ですから。できたら、喧嘩は二人でとめたことにしてください。では。おいしかったです。また、今度も機会があれば仕事お願いします。」

そういつて、急いで店を出る。

膨らんだ腹のせいで、来た時のような早さでは帰れないが、どうにか順調に終わったと思い込みながらゆっくりと、ゆっくりと歩いてかえる。

その時はまだ、自分があり地獄に足を踏み入れたあたりだとは知らずに。

「白、あいつの前で義久の話はするな。」

その場に倒れた全員を逃げないように縛り上げ終わると、店はしばしの休息にひたった。

喧嘩があつたため、客は自治団がきてそいつらを連れて行くまではいつてこないで、やることもなくただ待つだけだ。

「そんな事言つたテ、あいつは傷つかないだ口。」

「そりゃああいつは強いように見えるけどな。まだ、子供だ。」

はあーっとため息を出して、仕方なく話しに折れる。

「分かつたヨ。ほら、自治団キタから出てくれ。」

裏切りの現場から逃げることを選ばず、調べることを選んでしまった時点で自分の中で何かに負けた気がした。

負け戦には加わらずさっさと隠れ家へ本拠地へ戻ればよかった。

当たり前のように、そう学ばされているはずなのに。

そう、後悔しても遅いと分かっているながら、奥へと進んでしまう。

慎重に慎重に銃を構え、ゆっくりと。

ジャリ。

靴と砂が擦れる音。

瞬時に構えた銃を後ろに向けるが、それでは敵に勝てなかった。

「良い反応だ。しかし残念だな。2対1だ。」

後ろに立った者への反応はその者を上回っていたが、後ろを向いた隙に新しい敵に横を奪われてしまった。

首を軽く振って武器を捨てるように合図される。

仕方がなく肩に掛けたアサルトライフルと拳銃をを相手の足元に投げ捨てる。

かかとで地面をコツンと叩き隠してあるナイフまで捨てるように伝える。

よく分かつたと思ったが、大概の軍人など戦いをするものはそこにナイフをよく隠している。

当然か。

無防備になった今出来ることはただ相手に従うだけ。

「良い腕をしてるが、こっちはもう定員オーバーだから仲間にはな

れない。残念だ。」

「殺すのか？」

一番初めに俺の後ろに回った奴が銃をこめかみに突きつける。

「おいおい、よせつて。それより、お前は仲間の元に帰ってもらう。」

「目的は何だ？」

こめかみに向けられた銃がひかれる。

「俺たちが裏切って爆弾を奪ったのはもう分かってるな。奪った理由はこの紛争をなくすためだ。」

「たとえこの爆弾がなくなってもお偉いさんはまたどっから手に入れるさ。レアメタルを手に入れるために。なくならないさこの紛争は。」

まるで映画のような高笑いだが、戦場に響く。

「そうだ。そうなんだよ。レアメタルがある限りこの紛争が終わることはないんだよ。けどな、だからこの爆弾があるんだよ。一つ考えてみる。このレアメタルは何に使われる？携帯電話の半導体だ。ならばどこの国の？日本だ。日本から需要がなくなれば、この紛争は終わるんだよ。」

「日本に戦争を仕掛けるのか？」

「正確には島だ。お前も聞いたことくらいあるだろ。政府が諦めた島だ。そこに、戦争を仕掛ける。そして、間接的に日本にレアメタルの需要を減らすように要求する。」

こいつのしようとしてることは、ただの理想だ。

誰もが抱いてしまうはかない理想。だからこそ、それを追い求めてしまう仲間が集まる。

裏切りは当然か。

「お前は仲間に俺たちのことを伝えて、この国に迷惑のかからないようにしろ。無国籍のテロ組織そうなればベストだ。イヤだと言うのからこの場で死んでもらう。」

再びこめかみに銃口が押し付けられる。

「帰るに決まってる。」

「なら、さっさと行ってくれ。オレはイブラハだ。そう言えば分かる」

理想家だ。もしくはバカな革命家だ。

正直言うなら、自然と人が集まるタイプの人徳がある良い人間。

できれば、戦いたくないタイプだ。

それだけを言うと、輸送用ヘリに乗って飛び去って行ってしまった。

なんてあっさりと。どこぞのB級いや、C級映画だ。

そして、この静けさ。この紛争は一時休戦か。きつと他に色々手を打ってあるから無事に飛びたてたのだろう。正規軍ももう発砲をしていないし。

そうなると・・・黒幕がいるな。

こんな事して、儲かる奴等はどうな奴等だ。

絶好の金儲けの紛争を止めるなんて利益目的の奴らの犯行じゃない？

目的はこの紛争をやめさせること。

そんなことで資金は集まらない。あれだけの設備を自分たちだけで集めるのは到底不可能。

今は考えても無駄か。

なら。

思考の世界への扉を閉じ、拠点へ帰る準備をする。

「こっから何時間あるんだ。」

革命をするにも拠点へ帰るのも同じこと。人生は甘くない。ただ、辛いだけだ。

「日常から攻撃へ」

島が久々に牙を剥く、災厄が訪れるほんの前。

逆撫でされた猫のように、いや、獅子のように撫でたものをかみ殺そうと牙を剥いていた。

荒々しく、島らしく。

島の北側の一般客向け用の特に高いわけでもなく、普通のホテルに彼らはいた。

特徴と言えばホテルのオーナーにこれと言った金を払わなくても、武器や麻薬などは持ち込み放題で有名なホテルであるから、武装した集団が入ってきてもたいした騒ぎにならない。

「持ち込むのは構いませんが、くれぐれもこの中で騒ぎは起さないようにお願いします。」

このホテルを任されている支配人らしき、小太りの男がペコペコと頭を下げ部屋を出る。

「こんな所で騒ぎなんて起さないですよ。」

集団の中で最も若々しい青年・・・いや、少年が口を開く。しかし、相手は既に部屋の外である。

「まあこんな所なら武器持つてるやつらは全員そんな奴等に見えるんだろう。」

引き締まった顔に、無精ひげを生やしいかにも戦場を渡り歩いているような男も荷物を降ろしベッドに腰を下ろして話しに入る。

「見さかえなく殺るなんて俺の戦いの美学に反するんですよ。ね、トシさん。」

「なにが美学だ。戦争には美のかけらなんてそんなもはねえんだよ。殺るか殺られるかだ。」

「っておまえ等そんな事どうでもいいからちゃんと支度しとけよ。」

「隊長ー今からそんなに気張らなくてもいいじゃないですか、疲れますよー。」

各部屋への通達を終えこの作戦の軸となる人物が小部屋へ入ってきた。

「だいたいほかの部屋も同じような感じでしたでしょ？」

「おまえ等本当に先鋭なんだよな？」

「実戦派なんですよ。いざとなったらいるんですよ。」

ため息をつきながらベッドに沈む。

無駄に晴れたこの天気すら、いやになる。

窓から差し込む光が、目障りだ。

これからやる仕事の重さに苛立ちを覚える。

「なんでだよ。」

そう呟いた時窓と同時に彼らの世界は壊れた。

「ここのホテルか。間違ってないな。」

男性用の黒いスーツに身を包み驚くほど麗人で、会社に居ればできる女性と評せられるそんな彼女がそこに居た。
銃器で身を固めた集団の中に。

「ええ、この住所であってます。」

口にタバコを咥えると、その人が火をつける。

「違う。この情報事態がだ。」

「島からですので、安心だと。」

「島を騙すようなことは無いと信じたいな。」

吸っていたタバコを出された灰皿に押し付ける。

「まあ私達を騙すような馬鹿がいたら会いたいものだ。狙撃班と突入班に連絡。合図と同時に行くぞ。皆殺しにするなよ。貴重な情報源だ。」

そして、合図と同時に付近のビルからの狙撃とフロアからの催涙弾と同時に突入が行われた。

催涙弾と狙撃から逃げるために出てきた大勢の人間を急所を外しながら、動けなくしていく。

また一人、そして一人と、相手の人数が減っていく。

いくら相手が戦闘のエキスパートだとしても、この狭い空間で戦うなら、人数と武器が多い方が役に立つ。

「真田。」

その一言だけで、彼女の側近の男が、ケースから日本刀を渡す。

漆黒の漆だけでほとんど装飾されていないその刀はまさしく人を切るだけに造られた一品だった。

「お気をつけて。」

「誰に言ってるんだ。」

そして、本来最前線へ向わないはずの指揮官がそこへ向かう。

黒いスーツと日本刀。

この島の裏のさらに奥で生きている者にしか分からない最大の恐怖。

それが彼女であることを、彼らは知るよしも無かった。

時代遅れの日本刀で最前線を駆け巡る指揮官。北の誇る最強の自治団のメンバーの一人であるということ。

「ッゲ、ゲッホ、はあはあ、つぁー痛ってなあー。奴らが先に仕掛けてくるとは。おいおまえ等の出番だ。」

まだ、自分の身の危険が分からず、余裕をかましている彼の首の死神のカマが、いや、日本刀がかけられる。

「貴様が指揮官か。」

「な!？」

振り向きざまに見た光景は目を疑った。

銃弾が飛び交う中に刀を構えた女だあ？

クッソ。

あわてて引き金を引くが、どれも見事に交わされてしまう。

「こんな接近戦で、しかも刀相手に銃を使うとは言い度胸だ。」

彼女がゆつくりと、ゆつくりと刀を構える。

大技がこれから来るとそう何かが告げる。

ならば、来るのが分かってるのなら、それを避けて撃てば言い。

それほどの体勢からの技なら避けた後体勢を整えられんだろう。そこを狙う。

さあ来い。

ドサ。

そう思ったと同時に地面に何かが落ちる。構えた銃を彼女からそら

さないように注意しながら下を見る。しっかりと構えながら・・・

なに!？銃がない!？

どこだ?どこへいった?

「鈍いにも程があるだろ。こんな奴が大将だと思つと、部下の品が知れる。」

パシャ。

シャワーの始めの音のような音が手首から下と思い見てみると腕が無かった。

さつき落ちたのは俺の手?

「ツつうああああがaggagaああああ。」

切断面を押さえ込みながら、床に膝を着く。

「安心しろ。ちゃんとくつつつけてやるさ。その手が壊死する前に投降すればな。」

「はあはああああ、ああ。」

終わった。

彼の目から光が消えると、携帯を取り出して医療班に連絡しようと

したそのとき、彼女を殺気が襲う。

間一髪で身を反し、銃弾を避けるが携帯にどうやら直撃した弾もあったらしく見事にボロボロになってしまっている。

「生き残りか。いいのか？おまえ等の大将を救うための電話だったんだが。」

「ただでさえ使えないリーダーなんて、救う価値なんか無いね。どうせ作戦が終わったら消すつもりだったんだ、こっちの方が都合がいい。」

「いい根性だ。」

年は17、18くらいのまだ子供。といってもまだ私も奴をガキと言いきれるほど若くないのだが。

「あんたの剣は見せてもらったよ。日本の居合い切りってやつだろ。もう一回見せてくれよ。」

そして両手にナイフを逆手で持ち、襲い掛かる。

懐に入られないように適当に捌き距離を取る。

機敏な動きから、一転し刀をゆっくり上げる。そして、最小限のエネルギーで動き、最高のタイミングで最大の力をこめる。

見えた。

彼女の刀が、振り下ろされる。片手で止めて、空いた手で彼女の腹部を切り裂く。

綺麗だろうな。彼女の容姿が美しいだけではない。人は死ぬ瞬間が一番美しい。ここぞとばかりに最後の命が輝く。それに加えて切る相手が美人ならなおさらだ。きつた後のことを想像する。滅多に見れない本当の輝き。

その通りにするために、腕を上げる。
な？

防御を止め一瞬の判断で全体重をそらして腕を引く。

「ほう、避ける奴がいるとはな。腐っけていても本当に先鋭らしいな。」

「何余裕なっつてんだ。もう、あんたの剣は見切ったぜ。さあ大人し

く死んで輝いてくれよ。」

避けた拍子に床に転ぶことになったため、起き上がろうと右手に力を入れる。

が、なにも出来ずに床に再び転んでしまう。

「自分の状況が理解できてないようだな。」

右腕には深い刀傷ができていた。

そして、おびただしい血が止まることを知らないようにあふれ出す。

「見切ったはずだ。」

「まあその奴よりはましたが、のろいな。大人しく投降すれば、輸血くらいはしてやるさ。さあ、どうする？」

理解できない。正確に捉えていた刀が一瞬消えたと思うと、既に腕が切られていた。

「これが居合い？」

彼は知るよしも無いだろう。

彼女の刀がはじめゆっくりと振り上げられるため、一瞬で最大速度となった時の刀を目で追うことの出来なかったことを。

あまりにもそのスピードの差に脳がついていけなかったことを。

彼女が恐れられている理由を。

「見えない刀」と恐れられているのを。

「備えろ。」

叫び声と同時に、その場にいた二人は別々の理由で一気に跳ぶ。

「トシさん。」

「散々やられやがって、サビエラ。退くぞ。」

「他の奴等は？」

「知らん。」

そして、目の前のガラスを割り、飛び降りる。

「ツチ、まだ、いたのか。久しぶりだから、遊びすぎてしまったな。しかし、ここは17階だぞ。」

下を覗き込むが、落下死した訳ではないようだ。

どんな方法を使ったか知らないが、とにかく逃げられてしまった。

「^{やか}花様。大変です。」

「どうした？」

「彼らではありません。問いただしてみた所、彼らはテロリストを止める側の人間でした。」

しばらく沈黙が続くと、笑がツボにはまったように笑い出す。

「最高だ。この島を騙した奴がいるのか。これは、久しぶりに面白くなりそうだ。西と東と協力でもするのもありそうだな。それに逃がしたことを怒られなくてすみそうだ。」

「あ、あんた達何してくれるんだ。あ……ああなんて事を。弁償だ。弁償してもらうぞ。どこのもんだ。」

「おまえがここのホテルの責任者か？丁度いい、そっちの目的もあったな。島に無断で銃器および麻薬の流通を行ったため逮捕だ。令状もすっかりとある。つれてけ。」

振り返った彼女の姿を見たとき、男の顔が一瞬で恐怖の色に変わった。

百合のマークの入ったスーツ。島の関係者。逆らってはいけない者。理不尽な権力。

「ああ、す、すみません。どうかお許しを。我々の物でしたら、お好きな値段で取引させてもらいますから。どうか……」

「命乞いをする敵は生かすな。そう決めているんだ。」

血をふき取った刀を鞘にしまい、投げて渡す。

「オーナーを調べてそいつを逮捕しておけ、こんな下っ端では役に立たない。一度戻って直接島に聞くことがある。後を任せるものを適当に選べ。」

血みどろの廊下、人の屍の上をを平然と歩く姿は仲間ですら恐怖を植え付ける。しかし、それ以上の信頼を行動で部下に与える。

それが、この荒れ果てた島の治安を任される一人である。

砂漠を歩き続けること、丸一日。

始めに持っていた水はそこをつき、激しい脱水症状との戦いを勝ち抜き、どうにか拠点までだどりつく。

ようやく休めると安堵したのもつかの間、休む間も与えられずに、そのままリーダーの前につれてこさせられる。「イブラハのことに
ついて話せ。」

意識がぼんやりとして、身体が水分を求める。ここがまだ砂漠の真
ん中のようなだ。

どこに拠点があるかここにあるとも分からず、話しかけられている
ことを無視して辺りを見回す。

まともに話せないことが分かってももらえると、水の入ったバケツを
目の前に置かれる。

求めるがまま、バケツに入った水をすべて飲み干すと人と話せるく
らいにまでは回復する。

「裏切ったことが分かってるなら、言うことは一つだけです。国に
迷惑の掛からないようにして欲しい、と。」

「っは、何が国に迷惑をかけないだ。笑わせるな。裏切りに大義名
分もあるものか、敵に尻尾を振った奴が英雄になれるとも思って
るのか。しかし、何がどうあれ、敵が攻撃してこない今がチャンス
だ。奴を追え無論貴様もだ。今すぐにだ。さあ。」

「ちよつと待てよ。今がどういう状況下分かってるのか？奴らの黒
幕は？いつまで軍は攻めてこない？残りの物資は？今後の行動はど
うすればいい？」

まだ、足が覚束無いのか、ふらつきながらも叫び続ける。

「どいつもこいつも、騒ぎおって。連れて行け、ついでに先鋭を選
んで適当に島へ飛ばせ。」

「どのような者達を選べ……。」

近くに居たものの一人が話しかけると、一瞬空気が大きく揺れる。

「そんなことも言わないと分からないのか、クズが。貴様、代わり
に行って来い。おまえはそいつを片付ける。臭くてかなわん。」

久しぶりの仕事をするために島の数少ない入り口の橋へ向かう。

下請け屋には本来回ってこないような仕事。

島の観光案内。

この手の仕事は本職としてしているスペシャリストがいるんだが、俺のようなものに回ってくるというのは、公に出せない事情がある場合。

そして案内の希望場所は予想通り一般人のいけない闇市場や、持ち込みOKのホテルなど。

「しかし、わざわざこんな所に来て、何するつもりだ。」

約束の時間には十分時間もあり、今月は資金に余裕があるので、コ―ヒーとホットドックを買い食べながら歩く。

「今月は、食事抜かなくてもやってけるな。幸せだ。」

ほんの少しの間小さな幸せの余韻に浸っていると、それはすぐに崩される。

跡形も無く。

案内する相手がチンピラ程度なら問題は無い。

しかし、それが本物に近いなら、案内する場所などを考慮するとそれなりに危険な予感がする。

テロリストに武器とそれを隠す場所を用意する。

それが何を示すかはあらかた予想が付く。

ここが戦場になる。

下手をしたら、テロ行為に加担したと思われるしまう。

もし、見つかっていないのなら今すぐ戻りたい。

厄介事のおいがする。

今ならまだ間に合う。

そう思っただけ振り返ろうとすると、後ろから声をかけられる。

「お前が案内人の？」

仕方が無いと自分に言い聞かせ、相手を見る。

複数の外国人の中に一人だけいる日本人。

それだけで十分浮いているのだが、周りの引き締まり盛り上がった筋肉を持つものに比べたらそうとう細い。

しかし、だからといって体から流れる殺しの臭いは後ろのものに引けを取っていない。

逃げられないか。

心の中で静かにため息をついて、逃げる選択肢を手放す。

「あ・・・はい。」

「早速だが時間が無いんだ。少し早いが、行けるか？」

発音に微妙な違和感を覚える。

すると、俺の不自然な態度を読み取ったのか、説明を加える。

「ああ、育ったのは日本じゃないんだ。変かもしれないが許せ。」

「いや、別におかしくは無い。」

数人の仲間呼びかけ早速店を探しに行く。

「こつちでそろえると言うことは、正規の方法で日本に来たのか？」

「ああ。急な事情でこつちでは手配できなかったんだ。」

歩きながらさつき買ったコーヒーを飲む。

久々の本格の味に舌鼓しながら、目的の店へ向かう。

テロ？にしては、武装してこないなんておかしいな。

「何をするかは聞かないが、武器を持ったまま来る方法はあったぞ。」

「コーヒーを飲み終わると数少ないゴミ箱を見つけ投げ入れる。

運良く入った所を見て、軽くガッツポーズする。

「そうなのか？本当に急なことで、よく分からないままこつちに送られてきたんだ。それと、俺らのことをテロかなんかと思ってると思うけど違うぞ。テロを止めるために来たゲリラだ。」

「話していいのか？」

「どうせ、後ろの奴等には分からないさ。」

「まあ中東の方で資源めぐって紛争をしてたんだが、一部の仲間が

裏切って爆弾もってこの島に来たんだ。日本に資源の需要を減らすよう忠告するために。それで、俺らに飛び火しないように身内の始末をしに来たんだ。」

歩きながら簡単な説明を聞く。

なるほど。それで、出来る限り見栄えのいいメンバーで来たのか。

「なら、これだけっていうわけじゃないだろ。他は今どこにいる？」

「このことはよく分からないから普通のホテルに泊まってるよ。」

なんだかんだ話していると目的の場所に着く。

「ここら辺なら一見でも、武器を売ってくれる店は多い。当たり前
れは自分たちで見てくれ。」

ウルドュー語だったか？そっち方面は全然知らないのだが、確かそんな感じだったと思う。

俺の守備範囲は英語とギリギリ中国語なので、理解することは出来ないが、今俺があいつに言ったことを説明してるんだろう。

「なあ、そういえば名前はなんていうんだ？」

「名前か……。」

「無理に言う必要は無いけど。」

「アリ・ハルトだ。好きなように呼んでくれていい。」

「詩焉だ。アリ、仲間に見るのは後にするように言ってくれ。ホテルもいくつか案内しないといけないんだ。」

悪い奴には見えないんだけどな。しかたがないか。

仲間を呼びかけに行っているうちに、三月に連絡を入れといた。

そして、ホテルの場所を複数案内し、連絡先をお互いに交換して仕事を終える。

これから起こる事など何も予想できないままに。

人は相手によって態度を大きく変える。

それが別に悪いことだとは言っていない。

社会を円滑に生き抜くためには当然の行動であり、誰もが行っている行為の一つだ。

だから、さっきまで散々えぱり簡単に人の命を奪ったものも、自分より上の人間には頭が上がらない。

「ええ、先ほど送りました。・・・分かっています。・・・イブラハは単純です。罾とも知らず島へ向いしました。・・・ええ、大丈夫かと。それで何のためにこんなことを?・・・いえ、不満がるわけでは。」

電話の相手は、何一つこちらに状況を教えようとはしない。

電話を切ったことを確認すると、大声で叫ぶ。

「そくつたれがあ。何様のつもりだ。前線で戦っているのはこっちなんだよ。」

同じ事を部下に思われているとは知らずに、思いつきり叫ぶ。

しかし、電話の相手はそれを見透かしたように笑う。

「おいおい、あの豚今頃怒り来るってわめいてるぜ。」

「まったく悪趣味だな。」

若い声が飛び交う。

「当たり前だろ、せつかく作った会社が余り稼いでないんだ。せこい手使つても大企業にしてやんよ。」

「それで、わざわざゲリラ雇ってか?」

「どうせグズどもだ。数十匹減った所で何も変わらないだろ。」

「確かに。」

「ヒドｗｗｗ」

「ちゃんと足跡消せよ。」

「そんなもん付けてすらいねえよ。」

本来広いはずの部屋は、多種の電子機器によって埋め尽くされていて

た。

その隙間に入り込むように数人の人影が動き回っていた。

「島の方は？」

「心配すんなよ。あいつらがえばれるのは島の中だけだ。悪の総本山とか抜かしてやがるくせにたいしたこと無いんだよ。それに、とびつきのガードマン雇ってるだろ。」

「おい、誰か他のゲリラかテロリスト雇った奴いるか？メール着てるぞ。」

「それたぶんオレかも。暇だから賭けしようと思ってさ。今から2つの組を戦わせるからどっちが勝つかねえ。1千万からだよ。」

「のった。」

「オレも。」

声は次々と沸いてくる。

その数だけ、人の命が軽く扱われているなど、当の本人達には分からないだろうに。

しかし。こうして、現にこうしてこの世界が成り立っている。

この島に古くからあり、この島の全てを管理してきた島の組織。

自治団、自衛団、最近ではアイランドなどと微妙な呼ばれ方の違いがあるが、どれも同じである。

そして、その実態は現在でも多くは知られていない。

名前すら。

そして、何の変哲も無いただのビル。

従業員一人一人までもが、会社員を本気で演じているので誰もそこが組織に関係しているなど分らない。

本当に働いている従業員のほとんども。

そして、島に数ある組織の拠点に彼女は来ていた。

式音 しきね 耶花 やか この組織に属する人間。

関係者に適当に挨拶を済ませ、地下へ降りる。

在庫管理の部屋を通り抜け、さらに奥へ進み厳重に管理された厚いドアをくぐるとそれはある。

ただのビルの地下に広がる空間。

地上のオフィスとほとんど変わらない間取りでそれはある。

そこを基準にさらに4階降りると、所長室と書かれたプレートを下げたドアがある。

そして、乱暴にそのドアを開く。

プレートに書かれた文字を無視して。

「所長、これはどういうことですか。」

「言わんでくれ、こちらでも今調べている最中だ。」

何もせずただイスに腰掛けながら、あたかも忙しそうに振舞う。

「状況が分かっているようですが、この組織を騙した。それが何を意味するか分かっているしやいますよね。」

偽りの振る舞いを止め、真剣に話を進めようと態度を変える。

「ああ、相手は身の程を知らないようだ。これだから外の奴等はこちらにはこちらのルールがあるというのに……」

その愚痴は最後まで言えなかった。

言わせなかった。

「身の程を分かっている？それはどっちですか？この島を騙した組織にも責任があります。しかし、これだけ優れた情報網がありながら騙されたあなた方の責任の方が重いということです。自分の立場をよく考えてください。」

「待ちたまえ、耶花君。今回きみの部隊には死者いや、怪我人すら出ていないだろう。何を怒ることが……」

再び言葉は、机を叩く音にもみ消される。

「いつから、こんなにも甘くなったんですか。これじゃあそのうちの勢力に飲まれますよ。……上がこれじゃあ話しにならない。」

それだけ言つと、詫びも入れずに部屋から飛び出す。

「まったく、あの小娘め、少し腕が立つからっていちいちいち

言ってきやがって。お前こそ古いんだよ。ったく。力だけでどうにかなる時代は終わったんだ。」

そして、彼女と同じ様に自分の拳を机に叩きつける。

最新の設備に移ったばかりで、まだそこら中から新品特いつの香りがする休憩室。

販売機で買ったコーヒを飲んでさっきのイライラを潰そうとして休んでいると後ろから声をかけられる。

「えらく、不機嫌だなあ。あのクソ豚にもがんがんいつちまって。」

「言った所で、何も出来ない能無しだ。」

「まあそんなもんだがなあ、ああいう奴に限って仕返しが陰湿なんだぜ。」

「あら、心配してくれるの？」

皮肉を一言言つと、後ろの彼女が目線に入るところへとやってくる。

そして、向かい合うようにソファへ腰掛ける。

黒いスーツに身を包んでいる彼女とは違い、もう片方の服装はまっで正反対であった。

水着レベルに露出度の高い服に金色の髪をなびかせ、終いには、腰から銃を下げ、オフィスではこれでもかというほど存在感を出していた。

耶花と同じ島の組織の関係者の浅海あさみ 由ゆう

「あんたは良いわよね。最近良いことが多いいでしょ？何でも、違法薬のオリジナルの回収に成功したり、その関係者の身柄も確保したんでしょ？」

「ああ、前のあれか。まあラッキーと言えばラッキーなんだがなあ。良いところ取りしただけだ。未だに、よくわっかんねえけどよ。」

「あと、今日は非番じゃないの？」

「さっき本部から緊急の呼び出しくらってな、こっちにきたって訳だ。そしたら、上司怒鳴ってでてく奴が見えたからつけてきたんだ。」

「上司って言ったて、実質的な権力なら私達の方が上でしょ。本部の方がらわざわざ派遣されてるんだし。」

「言うねえ。」

そしてしばらく話は途切れ、互いに飲み物を飲み干す。

互いに飲み干したところで、話が再び始まった。

「能無しに頼るよりかは、自分でやったほうがましなんだけど。手貸してくれない？」

「仕返しかな？」

「まあそんなところ。これでもかってくらい劇的なのをね。」

日が暮れた後のぱっパァー。

閉店は店長の三月の気分しだいなので、夜が遅いとたまに入れないことが多々ある。

「今日は開いてるか。」

店の前に立って、つい口から一言漏れる。

いつも、連絡やそういう必要なことがある日は必ず開いている気がする。

こういう風に安心してこれるのは本当に嬉しい。

そう思っただアを開ける。

「いらっしやい。」

「ごくろうさん。」

昔からずっとそこにあり続ける彼女の顔を見て安心すると、奥から新しい顔がやってくる。

「いらっしやいませ。」

「怜火ちゃんもお疲れさま。エプロンに合ってるよ。」

「あ、ありがとうございます。」

顔を赤くして、奥へ逃げていく姿はまだ店に慣れてないことを照明している。

早く慣れれば良いなあ。

「私もエプロン着てるけど？」

「あ、似合って・・・」

「あんたが、さっき連絡してきた組織だけど、本当に止めに来たよ
うね。いちお、島の方にも連絡入れといたからなるようになるでし
よ。」

乱暴にサンドウィッチとコーヒーがカウンターに置かれる。

「あ、ありが・・・」

「怜火ちゃんに出してもらった方がよかったかしら？」

腹黒い笑顔で微笑みかけてくる姿に圧倒されてしまう。

下手したらそこら辺のチンピラより十分怖い。

「ちよつと、あ・・・」

止めても無駄でスタスタと店の奥に行ってしまう。

何を怒ってるんだか。

「おいしいぞー。」

聞こえたのかは定かではないが、いちお御礼をしないと酷い目に合
うのだ。

さてさて、アリ達はどうなるのかな。

止めるために来たのなら島と手を組めば・・・いや、そもそも
島が外部と手を組むことなんて殆ど無いか。

喧嘩両成敗、漁夫の利。

この島の管理者達が好む言葉。

利益を得るのは島だけという、徹底された考え。

「厳しいなあ。」

最後の一口を口に詰め込みコーヒーで流し込む。
やっぱり、おいしいな。

いつ食べても、変わらない味。

しかし、ずっと食べていける味だ。

「どうしたんですか？」

「ああ、やっぱり生きていくって大変だね。」

「？」

「ごめん、なんでもない。」

このサンドウィッチみたいに現実の後味がいいわけじゃないか。
まあ島で生きていくなら自分のことだけ考えてればいいか。

「攻撃から反撃へ」

そして再びばぶっパー。

案内をしてから数日がたち何事も無い日が続いていた。

しかし平和はこの島に似合わない。

常に激動し続け、形を変えるその島は休むことを知らない。

だから、こんなにも忙しい。

「三月。」

ドアを無理矢理開け、整っていない息から必死に声を出す。

さつき食べたラーメンのせいで今にも止まりそうだが、必死にこらえる。

「どうなってるんだ。アリたちが泊まったホテルが襲撃されたって。」

カウンターの奥にはいつもの顔が無かった。

「準備中よ。」

ソファーから、やつれきった声がどうにか届く。

準備中なのにどうしてドアが開いたのかは詩焉には分からなかったが、今は気にしてられなかった。

「やられた。私の送った情報いじられたみたい。あんたがくるまでずっと調べてただんだけど、全然足付かなかった。だから、たぶん外からの介入だと思うんだけど。それと、もう無理。」

言うことだけ言うとそのまま寝入ってしまう。

「詩焉さんが来るまで、がんばって起きてたんですよ。三月さん。」

3日も徹夜してたのに。」

掛け布団を持って奥から怜火が現われる。

「流石に今日はお店勝手に休んでも怒りませんよね。」

そついうとエプロンを脱ぎ久しぶりに見たあの姿になる。

「私も手伝います。」

「怜火は……。」

「三月さんがこんなに頑張ったんです。なら、私も頑張らないと。」

そう言っただけ資料を手渡す。

普通にまとめた持つのも困難になりそう資料の山から三月が編集したものだ。

簡単に短くまとめられていて、読めばその才能が十分分かる。

「テロリストの潜んでいる場所と、今後の爆破の危険予想場所です。アリさん？でしたっけ。その人を探す手がかりになればいいんですけど。」

さつきから何度かけても連絡がつかない。

島中を探す気でいたが、これでかなり限られるはずだ。

「テロリストを止めるために来たなら、なんとしてもテロリストの近くにいます。よし、行こう。」

冬は寒く乾燥して、夏は暑くて湿っている。

実に過ごしにくい気候。

それでも人はここに集まる。

だから、的となる。

「島は要望に応じるか？」

この軍のリーダーであるイブラハは身を隠しながら島の中を移動する。

傭兵として生きることによって培った勘を頼りに。

「未だ連絡を取ろうとできません。」

「いかれてるな。ここまで騒ぎを大きくしているのに。」

一般人とは違い戦いの中で生きている彼らでさえこの島を理解することは出来ない。

例えば爆破テロが起きたとしても、無関心でありそれすら日常の一部と思う彼らを理解することは出来ない。

確かに人々は怯え騒ぐがそれでも彼らの中にはその概念が存在して

いる。

心のそこから恐れ騒ぐのは、ここに着たばかりの者が観光客くらいである。

端から見れば異常だがそれがこの島の日常である。

「しかし、この島の半分もふっ飛ばせば流石に黙ってはいないでしょう。」

「革命か。人の命を助けるために人の命を奪うとはな。」

あまりにも皮肉すぎて自分自身がおかしくてしょうがない。

自分と関係ない人々を助けるために、さらに自分と関係ない人を殺す。

初めて革命という旗を掲げて戦いを始めて以来それだけが腑に落ちない。

多くの人たちが割り切れといった。

しかし、自分の隊を持った今でも割り切ることが出来ていない。

情けないし、あまりにも中途半端だな。

「各班からの連絡は？」

「全員はからはまだですが、着実に連絡はきています。」

「決めたポイントへしつかりと設置しろよ。最小の量で最大限の威力を出さないといけないんだ。出来る限り多くの民間人を巻き込むことが最優先の目的だ。いいなお前ら、この作戦にミスは許されない。自分たちの命のため、守りたいものの為に。」

その一言で全員の目に光が戻る。

たった一言で、数日連続で働いた疲れを取る。

力の入った、気持ちの入った言葉。

カリスマ性を持つものだけに許された力。

そして次々と声が沸く。

島を壊す声が島の中に轟く。

命令には絶対服従。

俺にはそんな義理は無い。

ただ今を生きるために戦っていて、偶然そちら側についただけであつて、本当にそれだけなのであるから命を懸けて、誇りをかけて戦う理由は無い。

しかし、今命をかけて俺たちは戦っている。

生きるためであるから。

この仕事を終えないと帰れない、報酬をもらえない。仕方がないんだ。

「サビエラさんの傷の具合は？」

「あまりいいとは言えんな。」

まるで野獣のような大柄の男が答える。

しかし、その体系のわりにはもっとも場の中に馴染んでいて目立たなかった。

本当の獣のように。

そして、彼はあたりを一度見渡す。

「助かったのはこれだけか。」

始め島に潜入した人数のおよそ半分以上。

戦うには人手や武器があまりにも足りない。

それでも、勝たなければ結局自分たちは消えていくだけ。

「どうして島の攻撃を受けたんだ。」

「邪魔であつたとか？」

「それもあるかもしれないが、最後の奴らの反応を見たか？まるで俺らをテロリストと思つていたようだったぞ。」

「はめられた？」

互いにため息をついて答えの出ない会話とやめる。

そして、もう一度仲間を呼びつめる。

中には先のケガが酷く動くこともままならないもの、どうにか軽傷で済んだものと、各々がいる。

「イブラハ率いる裏切り者達の居場所は突き止めた。あとは奴等を倒すだけだ。皆もうひと踏ん張りだ。頑張ってくれ。互いに生き残

るために。」

彼の言葉で少しは皆のやる気は出ただろう。

しかし、ケガの痛みを吹き飛ばすほどではない。

つまり、カリスマ性、リーダー性がないのだ。

「やっぱり俺にはあわないな。」

「それでも前のあの口先バカよりはましですよ。」

「褒められているのか分からんな。」

手元にある武器を各自見直す。

切り込み隊長のサビエラがいなくなったことで、バランスは大きく崩れる。

建物の中ではあの機動力が必要なのだ。

時に接近戦では下手な銃よりもナイフなどの短剣のほうが強いことがあるから。

「俺が切り込むから、お前らは後方支援に回ってくれ。俺を殺さないように頼むぞ。」

そして、火力を集める。

手榴弾はもちろん。ライフル用のグレネードまで、持てる限りを彼は集めた。

まるで要塞のように。

勝負でもっとも大切な物は？

ある人は言う。火力と。

ある人は行動で示す。火力の素晴らしさを。

ある人は言う。戦略と。

ある人は行動で示す。戦略の必要性を。

そして、互いの意地と意地がぶつかり合う。

「陣を組め。相手がいくら強くてもバラバラならどうにかなる。」

巧に陣を張り巡らせ、相手の攻撃を最小限にとどめ自分たちの攻撃を最大限に生かす。

「ひるむな。相手がいくら陣を張ろうとも火力で押し切れ。一つ穴が開けば全てにヒビが入る。」

持てる火力を全てつぎ込み、相手の陣を崩そうと自分たちの火力を最大に振るう。

そして、その時廃棄ビルは互いの意地がぶつかり合う戦場と化す。

「トシさん。」

「アリ、殺す気か！？しっかり援護しろ。」

戦略も何もなし戦場に飛び込む。ただ自分を信じて。その無計画さが逆に恐ろしい。

「イブラハさん。」

「大丈夫だ。陣形を崩さず耐え続ける。」

相対する者達がぶつかり合う。

互いに一步も譲らないはずだった。

サビエラがいる状態では。

本来切り込み隊長の役割を担っている彼がいてこそ本来の力を発揮するのだが、彼がいなくては力はつりあわない。

だから、彼らに先にヒビが入る。

いつもより武器を余分に持ったから。穴を埋めようとしたから。だから、いつもより動きが鈍くなった。だから、もう動けない。

「トシさん！！」

皆が呼ぶ。

まだ終わるわけにはいかない。

腐ったやつらのためにではない。一緒に戦った仲間の為に。ここで終わることは出来ない。

アリや皆の援護のおかげでどうにか、まだ生きている。

しかし、そのせいで仲間がどんどん減っている。ならば答えは一つ。

「逃げる！！」

皆が一斉に戸惑う。

「逃げるんだ！！」

負けを見た仲間が一斉に逃げ始める。

それでも最後の最後までその姿を見ようと彼らの目は彼を放さない。

「トシさん。・・・皆、集合ポイントで落ち合っぞ。」

トシさん。いままでありがとうございます。

今まで何度か一緒に戦ったこともあり、そのたびに助けられたことを思い出し、心の中で深く御礼をする。

「もう終わりだ。トシ。俺たちは止められない。安心して逃げ、紛争はきつと減る。」

周りを囲んでいた仲間が銃を向ける。

悔しい。

手榴弾に手をかける。

せめて・・・。

そう思ったとき、天井が崩れる。

当たりが真つ赤な血で埋め尽くされる。

「トシさん。」

「サビエラか!!」

斬られた傷はまだ治っておらず、包帯に血が滲む。それでも、彼は止まらない。止められない。

「あんたは育ての親だ。腐った世界で生きる術を覚えてくれた。だから・・・。」

しかし、世界は上手く動かない。

一方的に都合のいいことなんて決して起きない。

ましてケガが完治していない状態で戦っても、始めの奇襲がうまくいくくらいだ。

だから、鉛球が彼を襲う。

「サビエラ!!・・・イブラハアアア。」

ピンに指が掛かる

「その恨みも全部俺が背負う。」

爆発は起こらなかった。

昔、日本と言う世界に飽きた。

上司にただただ頭を下げ機嫌をとり、何をやってるのかわからない仕事に朝まで一生懸命になって、仕事の後のビールのために生きる毎日がイヤになった。

そして、財布だけをもって日本を出た。

日本では見られない人の暖かさを知った。

日本では見られない世界の残酷さを知った。

初めて日本がどういう国か知った。

子供が銃を取り、自分が物陰に必死に隠れる事実を目にした。

覚悟を決めた。銃を取る。

1人でも自分が代わりになるように、そう思った。

子供の手を真つ赤な血で染めないように。

しかし、世界は甘くなかった。

銃を持たない子供は手を相手の血で真つ赤に染めるのではなく、自分の血で染めることになった。

世界に絶望した。

無力に絶望した。

全てを、一部でもつぶせればそこは平和になると分かった。

だから戦うことを胸に刻んだ。

そして、数々の戦場を回る中で捨て子を拾って育てた。

未来のために。

「見つけたか？」

「はい・・・しかし、既にその場所にはいませんでした。」

ピリつとした雰囲気さらに引き締まる。

出来るものならば、このことを報告をするのを誰かに代わって欲しかった。

そう、何度考えたことだろうか。
しかし残念なことにもうおそい。

「なに？バレタのか？」

「い、いえ、つい先ほど戦闘が行われていたようで。」

「ツチ、奴等か。こんなことなら全滅させておけばよかった。」

「なあゝに気にすることだねえよ。単純なこつた、邪魔な奴等は探し出して全部つぶしいいじゃねえか。」

彼女の介入に心底ホツとしたのは彼女を見ている全員が思ったことだろう。

なだめるように話しかけるが、彼女の方が自分の内側に狂気を持っていることを彼は知らない。

あまりにも大きい狂気を。

「絞り込んで探すか。よし、まずは港から奴らが帰りに乗っていくための船を捜せ。不審と思われる物があれば無理にでも調べろ。次は街を爆破した場合最も安全且つその現状が見れる場所だ。奴等とてこの戦いに命を懸けているわけではない。」

その指示を聞いたとたん彼らは一斉に動き出す。

無駄なく素早く。

集団行動の素晴らしい例だ。

「あたしやなんかすることでもあるのかい？」

皆がせわしなく動く中、司令塔の彼女以外にもう一人動かない人がいる。

「揉め事専門だ。」

「せっかく呼んどいて使わないのか？切り札持ったまま終わっちゃうのはかつこ悪いぜ。」

「人生何事もタイミングよ。」

「なら、そのときまで勝手にやらせてもらっぜ。」

「・・・そうか。」

あまりにも不自然な会話。

全て管理することにこだわったような彼女があいまいな彼女をその

まま通すとは誰も思いもしないだろう。
しかし、全員は現在激しく行動中だった。
そんな事をまともに聞くこともままならないほどに。

街の入り組んだ道を走る。

手に入れた情報を頼りに一番確率が高い所を目指して。
さらに、走っている間に耳に入った情報が目的地を明確にしてくれる。

この先で結構大きなドンパチやってる奴らがいる。
偶然耳にしたその言葉を信じて走る。

「アリ!!」

数日前の記憶を目の前の人物と照らし合わせる。

「詩焉？」

しかし、感動の再会とは行かない。

突然胸倉を掴まれ、銃を突きつけられる。

「どういうことだ。どうして俺たちが攻撃された。」

「それは・・・。」

「お前ぐらいしか場所を知っていないだろう。ここに来た理由も。」

さらに強く押し付けられる。

引き金が引かれていない事が不思議なくらいだ。

「島の外から介入された。じゃなきゃわざわざお前を探しに来ない。」

「

情報操作。やつらの仕業か？」

「そこまでは調べられなかった。けど、信じてくれ、お前を助けに来た。」

突き飛ばすかのように手を離す。

どうにか信じてもらえたか。

「そっちは？」

「怜火だ。仲間だ、安心してくれ。」

「よ、よろしくおねがいます。」

ペコリと可愛らしく頭を下げる姿は本当に戦うものの姿とは思えない。

「アリ・ハルトだ。よろしく。」

「他の仲間はどこだ？できれば逃げる手はずを・・・」
見事なタイミング。

まさしくその通りしか言い様がないタイミングでそれは起きた。

ギリギリ目で見えるところに爆風とともに火柱が上る。

「ッ！！・・・見ての通りだ。」

例え爆発が起ころうとも、自分のみに降りかからなければあくまで無関心。

それがこの島の住人の特徴だ。

だから、焦っている俺たちはこんなにも浮いた存在になってしまう。

アリがあたりを見回す。

「何でこいつ等は、こんなに平然としてるんだ。」

「自分たちに関係が無いから。巻き込まれたくないから、関与しないんだ。そうじゃないとここじゃ長生きできない。」

ここのルールがいまいち理解できないのか、納得した表情を見せない。

「これからどうするんだ？」

「ああ・・・逃げるにしても帰れないし、戦うにしても俺一人じゃどうしようもない。」

悔しそうに力強く銃を握り締める。

「それは実弾か？」

「ああ。」

「なら、こん中から適当に選んで換えてくれ。自衛団は実弾使ってる奴には容赦ない。」

そういつてバグをアリへと投げる。

「詩焉、これは？」

そう言つて数日前の白龍で手に入れた電子機器を取り出す。

「偶然手に入れたんだ。売ればいいと思つて。」

「これは・・・嫌なほど運が回つてきたな。」

「これが本当に起爆用スイッチなんだな？」

「ああ、一件見ても分からないようになってるんだ。」

そう言つて、機器のフレームを外していくと一回り小さく、ボタンが多い機器が出てきた。

手作りらしく、どのボタンにどんな役割があるかは本人、仲間にか分からないだろう。

「な。」

「ああ。ところでそれは大丈夫なのか？間違つて起爆しちゃったじゃ、洒落になんねーよ。」

「それは安心しろ。起爆コードを入れない限り何をしてもホールド状態だ。」

「売らなくてよかったさ。」

「どこでこれを？」

「あー、話すと長くなる。」

「詩焉さん、もしかして。そういうことですか？」

「そういうことだったりする。」

首を傾げるアリに分かりやすく説明するため、ある場所を目指す。

「龍さん。」

「おお、詩焉。客連れてきたのか。よくやった。」

戸を空けた瞬間、香ばしい香りが鼻をくすぐる。

さつき食べたラーメンの味が脳裡に浮かぶ。

「さっきの客は？」

「ああ、さつき自治団が連れてった。何にする？お勧めは・・・。」

「そんな。」

「一足遅かったか。」

「つておい。」

「これじゃあ、奴等に会えない。」

「自治団に爆破魔と伝えるか？」

「いや、それじゃあアリの身柄や俺たちまで影響がどうすれば。」

「わたしが行ってヤロウ。」

「白さんが？」

「店の修理代請求しに行けば、会える。急ぎノ用らしいしナ。サービスだ。」

「いいんですか？」

「ただ働きの待つてるガナ。覚悟しとケ。」

「分かってますよ。」

「あれ？サービス・・・ん？」

「これが白さん、なんだ。また次ぎ来た時にちゃんと紹介するよ。」

その時だけは鉄火面の彼女の笑顔を見れて、久しぶりにただ働きもいいと思った。

その時だけは。だ。

争いによって血が流れる。

おのれ等が守りたいもののためではなく、身勝手によって自分たちが、そんなことに利用されたとも知らずに。

「ダアアア。負けた。」

奇声を上げながら、キーボードの上に覆いかぶさる。

「っしやあ。やっぱこっちに懸けとくべきだったな。」

次々と賛美や悔恨の声が上がる。

端から見れば、パソコン上のゲームに負けたように見える。そうにはしか見れない。

しかし、スクリーン上に映る物は、本物の戦場である。

そこでは、兵が死ねば簡単に購入できる訳ではないし、死んだ人は帰ってこない。

攻略法、チート、リセットなんてもつてのほか。

現実の戦場を使い、ゲリラ達を戦わせ賭けをする。

そして、それを純粋に楽しみ、成立させるその場は狂気に入り乱れているとしか言いようが無い。

「あーつまんね。島の方さっさと爆破させちゃう？」

「ちよつと待てよ、爆破してから仕事の準備が終わってねえよ。」

「そんな事あったっけ？」

「あの島が欲しいから爆破するんだろ？爆破した後に新しい組織送り込んでそのまま指揮系統をのつとるんだよ。」

その説明を聞いて納得したような素振りを一瞬だけ見せる。

「今送り込んでる奴等は？」

「そいつ等は、もういらないって言っただろ。」

「まあいつか。」

島の犯罪者収容施設。

数多くの犯罪者を閉じ込め更正させるそこは、理由ゆえ要塞のようであった。

高い塀そしてそれに掛けられた高圧電流、赤外線センサー。

侵入と脱出の両方を完全に防ぎ、どんな攻撃にも耐えのける。

「いつ見ても、禍々しいなここは。」

「こんな所島にあったんですね。私知りませんでした。」

「まるで要塞だな。」

「さっさと入るゾ。」

一般用の入り口へ向かうと看守が厳重な装備をしてお出迎えた。

「用件は？」

「所長に白だと伝えてくれ。」

仲間と代わり、連絡を取りに奥の電話へと向かう背中を見ながら質問をする。

「白さん。ついでの域じゃないですよね。」

「つべこべ言うナ。入レルだけでもイイとし口。」

連絡を終えた看守が戻ってくる。

「入れ。」

身体検査もなしに、そのまま入れてくれるなんて、どういうコネがあるんだろう。

道が分らないので、先へ先へと進む白さんへ付いていくとあるひと部屋へとたどり着いた。

所長室。

軽くノックしてドアのぶに手をかける。

ドアが開いた瞬間姿勢を低くする白さん。

何事かと思いついてみるとなんと壁にナイフが突き刺さっていた。

「ッハッハッハ。よく避けたな。前線を退いたと言うから心配していたがまだまだ大丈夫そうだな。」

「いえいえ、ご指導しただいた頃に比べれば、その半分ノ力も出せません。」

もし、当っていたらどうしていたんだろうか。

「それで、どうしてこんな所まで来たんだ？」

「さっき連れて来タ奴等二会いたいのですガ。」

電話を取り連絡を済ますと看守がやってきた。

「こいつに案内を任せた。」

「ありがとうゴザイマス。」

俺達は喋る間もなく部屋から出される。

「すごい、おっさんだな。」

「ああ。」

「なんか、こう・・・すごい人でした。」

服の下に隠れた肢体に引き締まった筋肉があることは見る人が見れば分かる。

しかし、表情の下に隠れた本性に気付けた者は怜火だけであつた。抽象的だが。

「それで、もう戻ってこないのか？」

「すいません。」

「いや、私も執着しすぎた。キミがあまりにも優秀な生徒だったからな。それじゃ。」

「はい。お体にお気ヲつけてください。」

「こちらです。」

「ごくろウ。」

それぞれここまで案内してきてくれた看守さんに挨拶をすると2つの監獄の中に目を向ける。

質素な部屋の中に無理やり押し込められた姿は、暴力を振るわれた側からすると、かなりいい光景に見える。

しかし、まともに直視できないほどの殺気が溢れ思わず目をそむける。

「いい目してんじゃん。アリさつさと聞いてくれ。」

「ああ。」

理解できない言葉を使い会話を進める。

どうせ時間はたっぷりあるんだから中東部付近の言語を習おうかと思つた。

きっと英語などは通じるだろうが、自分に分らないように母国語を話されるのはすこしいやな気分だ。

「俺たちに話す義理はないだとさ。」

会話を終えたアリが日本語に入れ替える。

「言エ。出してやル。店のほうの請求は二オンジンだけにしてやる。」

仲間内で話し合い、自分たちのこなす作戦に支障を出さないため現場へ戻ることを覚悟する。

「まずはここから出せだつてさ。」

「危ないだろ。それに鍵もない。」

「それなラまかせトけ。それにこんな小物ども逃げたつて誰も気にはしない。」

そう言つて腰あたりから鍵を取り出す。

「白さんいつの間に。」

そう言つている間に、鍵を開けている。

たまにあるのだが、こちらの話などまるで聞いていない。

「さつさと話セ。」

しかし、開けたら終り。

すばやい動きで怜火の後ろに回りこみ、どこに隠していたのかナイフを首に押し当てる。

店で白さんの实力を見たのか、あえて近づかず、唯一のまともそうな女の子の怜火を人質にする。

「殺されなくなかったら、その鍵を渡せだつて。」

「いいからさつさと離れたほうがいいって言つてやれ。怜火は・・・」

ドスン。

遅かったか。

ナイフを突きつけていた男が中を舞い、きれいな弧を描いて思いつきり地面へたたきつけられる。

そしてナイフを奪いもう一人の足へと投げつける。

ほんの一瞬に間で男たちは自由という希望を徹底的に打ち砕かれた。

「怜火は普通の状態でも強いんだ。」

「あ、危ないじゃないですか。急にナイフを突きつけるなんて!？」

しかし、片方は打ち所が悪かったのか気絶してしまっているし、もう一人は自分の悲鳴でそんなことを聞いている暇はなかった。

「アリ気をつけるよ。この島じゃ男より女の方が怖いんだ。」

「詩焉さん。それってどういうことですか。」

「ああ、気になるナ。」

苦笑しながらアリがこちらを見る。

納得したのか、それとも同情してくれるのか、はたまた両方なのか俺には考える余地がなかった。

「確かにナ」

「さっさと話せ。どうせ逃げることなんてできない。もつと痛いメにあいたイなら、ほら逃げ回れ。」

気絶していない男のほうへと話しかける。

伝わっているなんて思ってもいないが、その雰囲気だけで俺だったら圧倒されることだろう。

足にナイフを刺された状態で痛みに耐えながら話をしろなんて無茶なことを言う。

今でさえ、口から声を出さないようにこらえているので必死だというのに。

とんでもなく、恐ろしい。

そんな姿をしてこの性格まさに鬼姫だ。

ふと、そんなことを考えてると、不思議な顔をして白さんが話しかけてくる。

「どうした、詩焉。」

「い、いえ。医務室の人呼んで、もうひとつの部屋にいる人たちに話を聞いたらどうですか？この有様を見てるんですから、もう話してくれると思いますよ。向こうだって痛い目にはあいたくないでしょうし。」

「そうだな。医務室へイてくる。それまで二話ヲつけておけ。店にそろそろ戻りたいんだ。」

「ありがとうございます。」

あの性格を知つてもちゃんと挨拶をできるの怜火はどこかずれてるというかなんというか。

見習つていいのかわからない。

「おい、おっさん達見てたろ、話せよ。そっちは丸腰で、こっちはちゃんと武装してるんだ。看守もいないし、どう転んでも不利なのはあんた達だ。」

「分かったよ。降参だ。あの女なら平気で拷問でもしそうだ。それに、もう遅いしな。話してやろう。」

「動機ならもう聞いている。あいつらはどこにいる。お前らが持っていた起爆スイッチはどれほどの爆弾に接続されている。もし爆破した場合の被害は？」

「まず、その起爆スイッチはこの島に仕掛けた爆弾の8割に対応している。さらに被害予想はこの島の6割ほとんどのライフラインは止まり、普及には1週間以上かかる。事実上島は死ぬ。ああ・・・スイッチはそれひとつじゃない。時間通りに俺たちが行かなければ、隊長が他の端子から爆破コードを入力する。まあそれはそのスイッチの5割程度の爆弾しか起爆できないが、島に与える被害は十分だろう。」

「場所は？」

自分でも驚くほどこの島の被害予想を聞いても平然としていられた。

それは、まだ自分がこの島の住人になったことを自覚してしないからか、それ以上のものを日常で見えてきたからかはわからない。

少なくとも今の俺には自分以外の命をそれほど重く思っていないのだろう。

人として悲しいことだと軽く呟くが、人の価値を知っているからこそ、この考えが生まれたのだと今は自分を信じる。

「それだけは言えないな、小僧。」

鉄柵越しに胸倉をつかんで思いつき相手を引っ張る。

鈍い音が響いて、怜火は思わず目をそむける。

・・・痛そう。

「言え。」

銃を構える。

「ゴム弾だつてな、この距離から撃てば当たり所によって十分人を殺せるんだ。」

「脅しは効かない。」

相手の目をにらみこむ。

よく見た目だ。決して仲間を売らない目。どんな拷問にも耐えられる目。

たぶん、勝ちを確信しているのだろう。

「詩焉場所は分からない。けど、このスイッチは島に仕掛けられた爆弾の8割に繋がっていて、その爆弾が与える被害はこの島の6割に及ぶそうだ。」

思わず唾を飲む。

6割。しかしそのうちの8割の支配権はこちらにある。

「ならこのスイッチがある限り最悪の事態は防げるんだな。」

「悪い、言い忘れた。やつら他の起爆方法を持っているらしい。それでは、そのスイッチほどの爆弾は起爆させられないが、その5割程度までならできるらしい。」

絶望的だ。

そもそも、こんな大規模作戦を立ててくるんだから、もしものためを考えて起爆用スイッチだって複数用意してくるだろう。

打つ手無し。

こういうときは頭脳派のあいつを頼るしかない。

本当に頭の良過ぎる奴。

「仕方ない。三月に頼ろう。疲れてるところ悪いんだがな。はあ・・・
・アリ終わったらお前も協力しろよ。」

帰ってきた白さんが医務室の人らしき人に話をつけ終わると一緒に戻り、店へ戻るといつて分かれた後、携帯に手を伸ばす。

「三月か？」

自分の寝起きが決していいわけじゃない。

朝目が覚めると、今日も一日がんばろうなどと、とてもじゃないが思えない。

とにかく目が覚めれば、今日も一日がんばらないといけないという重圧に押しつぶされ朝からとんでもなく嫌な気分になってしまう。つまり目覚めが悪い。

できれば、頼むから他の人は自分より寝起きが良いことを願いたい。

恐る恐る携帯に手を伸ばし、アドレス帳を開く。

「三月か？」

「あたし以外に誰ってんの？」

こういうときに限ってツキが無い。

「三月さんここ最近ずっと仕事やり込んで、寝てないんですよ。」

結果は変わらないが、それをもう少し早く言ってくればよかったのに。

しかし、後悔なら後でする。

「テロリストの居場所を調べてほしい。後でいくらでも働くから頼む。」

「正しいかなんて分からないし、今さっき手に入れた物でいいなら。」

そう言って電話を切るとファイルが添付されたメールが届く。

どうにか、ここから近そうだ。

「時間もなさそうだから急ごう。」

「場所の割り出しができました。」

島のすべてを統括する彼らでさえ、事前にあつた反抗予告から相手の居場所を搜索するのに一週間ほどかかってしまう。

この島の管理システムを徹底して調べつくした結果であらう。

すべての監視カメラ、巡回の警備員のコースと時間帯すべてを調べ、もつとも見つかりにくく安全な場所を選び出す。

「舐められたな・・・しかし、こちらの油断を付かれたとなると怒るに怒れないな。これが終わったら、見直しを申請しなければ。」

時計を見ると午後3時。爆破予定時刻までのこり2時間。

止めを刺すチャンスはこれだけか。

由はまだ帰ってきてないか。減った手札で再度作戦を立て直す。

できる限り怪我人死人を出さないような作戦を立てなければならぬ。それが上司としての義務でありこの島で生きていくための力の誇示である。

「この施設の地下出口はたぶん下水道に繋がっているな、そこにも兵を配置しろ。発見した奴らの船は抑えたな。」

「既に42隻の身元不明船が発見されましたがいずれも犯人グループ達のもではありませんでした。海に繋がる水路やそれ付近にもありませんでした。奴らが水上で逃げる線は薄いと思います。」

「爆破後のこの島の機能停止と共にヘリなどで逃げるのが今のところ有力か。対物ライフルを都市部から離れた場所・・・そうだな、西海岸に配置。場所は自己判断だ。未確認機は何が何でも撃ち落とせ。」

各自に連絡を入れる。

「よし、各自ポイントに10分で来い。遅れたものは命が無いと思え。」

「耶花様、由様はいかがしましょう。」

少し手を顎に当てて考え込む。

コクコクと過ぎる秒針が妙に気になる。

どうやら顎に手を当てるのが私のクセらしい。別に何か考えてないときでもなぜか自然の当ててしまう。

こういうクセは出来るだけなくしたいものだ。

「好きにしてるさ。あんな戦闘狂がこんな状況を楽しまない訳が無い。あいつなりに仕事はしてるはずだ。急ぐぞ、私が遅れては話にならん。」

「あと2時間で、反抗予告時間だ。」

手に持った銃を掲げて最後の士気を高める。

しかし、心の中はまったく違う。

なにが、反抗予告だ。

俺たちは誰かを助ける英雄じゃない。

テロ行為を行う革命家だ。

爆破の時間まで守って、こんな格好つけて、意味のない要求を突きつけて何になる。

死んだ仲間はどうなる。

雇い主は何を考えている。

こんなことでは裏切ったことが正しかったか分からない。

腐った中で、使いもしないレアメタルの発掘権利を奪い合うことと、この戦いどっち正しいか分からない。

「この山場を乗り越えれば、俺たちの仕事は終わり、大金が入り俺たちの名は広がり家族や友人を救うための革命がさらにやりやすくなる。」

確かに、家族、友人、恋人と、いろんな人のために戦っているが、こんな戦い方は望まない。

「起爆スイッチを持った仲間は捕まったが、この島を壊せるだけの爆弾を起爆させるスイッチは他にある。陣形を整え迎えが来るまで耐え抜くぞ。」

初めこの計画を聞いたとき、無茶だとは思ったが、驚くほど正確に

調べ上げられた島のセキュリティに物資と資金を見せられて思わず鵜呑みにしてしまった。

どの場所をやれば対空戦力がつぶれ脱出用のへりを迎えに越させられるか。

それがだめなら海からの脱出方法など、あらゆる手を提示された。

しかし、ひとつだけ分からなかった。この戦いの目的が。

俺たちは、経験と経歴が必要だったから深く追求しようとしなかったが今となればどうして聞かなかったのか分からない。

とにかく、仕事を終わらせ生きて帰らなければ。

「反撃」

間違いなさそうだ。

都市部から程よく離れた大きな廃棄工場。

まさしくボスの登場にはもってこいの場所だ。

見回りは表にはいないだろうがきつと中から見張ってるな。

人の気配は少人数ならともかく、アリから聞いたような数だとしたら流石に隠しきれないだろう。

しかし、入るタイミングが……ないか。

正直やつらを倒そうなんて微塵も思っていない。

ただアリに後腐れがないようにするためにここに来たんだが。

「どうしたもんか。」

打つ手がなくその場に考え込む。

「詩焉さん、自治団さんたちが来ました。」

こんなときに限ってやってきやがるか。

やつらにさき越されたら元も子もない。

「とにかく今は隠れよう。うまくいけば、中に入るチャンスかもしれない。」

奴等中に気を配ってるからこっちまで気を回してないだろ。

というより気を回す余裕なんてないだろう。

島ひとつダメにする爆弾抱えたテロリスト相手に余裕を見せれるはずがない。

まあいまだ実感が無い俺らは妙に落ち着いているけど。

急に爆弾が爆発した後のことを考えてしまう。

何も知らない人たちはただただ島とともに一生を終えるのだろうか。

もともとここに住んでいた罪のない人たちはどうなるんだろう。

とんでもなく重大な責任を感じてしまう。

……いや、自治団がどうにかしてくれるさ。

他人に任せて自分にかかるプレッシャーをはねのける。

俺は俺がやるべきことだけに集中すればいい。

最後に願う。

やつらが、神の名を叫んで自爆しないことを。

それにしても、自治団を見ると最近のいやな思い出がよみがえる。

あの派手な女はいないよな。

不安になりあたりを見回す。

ふと、一人目出す人物を見つけ出す。

男装、麗人、帯刀。

なんか、女性に対する自分の中の考えが最近大きく変わりつつあるんだが。

この島にまともを期待するわけじゃないんだがな。

「詩焉さんなにをずっと見てるんですか。」

「い、いや、なにも。」

一瞬考えが読まれたのかと思い、ドツキつとして鋭い目線から逃げるように、アリに助けを求める。

「どうだ、中には入れそうか？」

「やつらの突入の後に入れればいけるだろうな。タイミングしだいだ。あとは・・・」

装備を点検しなおして、身にまとった雰囲気を尖らせる。

「死なないだけだ。」

覚悟を決めた顔だ。

いつ見ても人が覚悟を決める瞬間の空気には慣れない。

あの背筋がゾクつとする感じが。

自分も何かを捨てないといけないのかと錯覚してしまう。

「まあこんな武器じゃ、心もとないがな。」

雰囲気のを和らげるために軽く笑う。

戦いに慣れているからこそ、他人の心配ができる。

まあこの島生きているんだ。俺たちに気を払わなくても大丈夫だ。

「そついうな。人を殺すところの島だと大変だ。治安のため厳しいぞ。」

力持ってからやればいいさ。やりたければだけど。」

「各員配置に着きました。」

耳のイヤホンから無線を通して、現状が伝えられる。

都市からほどよく離れた工場。

ここからなら爆破の被害も少ないだろうし、逃げるには人目もつかず容易かつただろう。

敵の隠れ場所には丁度いいか。

・・・なら、どうしてこんなに時間がかかった。という話なんだが。

やはり、怠けているな。

ここ数日でよく理解しただろう。

今この島がどれほど危険な状態に陥っているのか。

気を抜けば、島の支配者などという地位も一瞬でなくなるといふことを。

誰もがこの島を欲していることを。

世間からの影響を受けず、たいした法律もない、秩序を強制されない夢の島。

違法組織から見れば、まさに夢の島。

今を続けたいのなら本気を出せ。

マイクの部分を軽く近づける。

「よし。こちらの合図で攻撃を開始する。第一目標は起爆スイッチを持つてると思われる敵司令官。判別は相手の雰囲気を読み取れ。」

無茶な命令だと思う。

しかし、それをできないようならこの部隊にはいられない。必要ない。

本当に戦いに特化したものを集めた部隊。

個の力を重要視するのではなく弧の力を重要視する。

それが島の部隊だ。

「第一班攻撃開始。」

声を合図に窓へとフラッシュグレネードが打ち込まれる。

外からでも、網膜を焼き尽くすような光が漏れたのを確認できる。

「狙撃班。」

離れたビルから可能な限り狙撃をする。

誰を撃つのかは個人の判断に任せている。

「狙撃中止。第二班突入。これよりジャミングにより相手の電子機器をつぶすため、通信が一時的機能しなくなる。相打ちはするな。いくぞ。」

合図と同時に数名の先鋭が工場の中へと帯びこむ。

目をやられた敵を撃つのは簡単だが、油断してはならない。

誰が今自分の事を狙っているかわからない。

そこで目を抑えているやつが実は演技かもしれない。

戦場ではとことん臆病で冷静になれ。

決して敵を侮るな、熱くなるな。

いかれ狂った殺人鬼と冷酷な殺人鬼ではどちらが恐ろしいか考えてみる。

殺す相手に優先順位をつける。

しかし、自分は万全ではない。

後るか!?

ダメだ。間に合わない。自分の銃口が相手を捕らえるよりも、相手のほうが強い。

思わず目をつぶる。

しかし、銃声は響かない。

「戦いの中目をつぶるな。常に冷静にあたりを見渡せ。」

「夜花さん。」

皆が銃で身を固める中、一人だけ目立つ日本刀を持ち戦場を駆け抜ける。

斬られた男の傷口はあまりにもきれいであり、職人の包丁捌きを思

わせる。

「気にするな。行け。」

余計なやつを斬っている場合ではないのに。
スイッチを押される前に頭をやらないと。
そこか。

雰囲気でわかる。

冷静に辺りを見回すその動作。

まさしく、やつだ。

一歩一歩を大きくとり、一気に相手の差を縮める。

そして、勢いよく刀を振り下げる。

腰の振りと、体重を乗せた完璧な一撃。

しかし、止めを刺しきれない。

「我々の勝ちだ。この周辺はジャミングがかけられている。もう爆破はできない。大人しく死ね。」

「甘いな。ジャミングの対応は完璧だ。」

手元のパソコンへ走り、キーボードを操作する。

「アメリカの軍事力は素晴らしいからな。」

もう、斬る時間はない。

腰に巻いたナイフを投げる。

正確に投げられたそれは、肩を捕らえるが相手は止まらない。

「終わりだ。」

もう一度投げられたナイフが眉間を目指し投げられる。

しかし、スイッチは押された。

「悪いな夜花、こっちはお前に任せた。」

高層ビルのエリポートに無音のヘリが今にも離陸しようと、準備を整え乗り込むのを待っていた。

「いいか、てめえら、務所にいる爆破魔からこの島の爆破ポイントしつかり聞いてこい。釈放の条件だとしてもアドバイスを聞け、ん

で、それに従って爆弾見つけて解除しろ。いいな。島を守るのが私らだ。」

ヘリの周りには数十名の男女が、強い風にさらされても毅然と立ち話を聞いていた。

そして、ヘリの近くでも声が聞こえるこの技術は卓越したものだろう。

いまだこの島の全貌は明かされない。

明かすことができない。

このヘリがこの島で作られたのか、どこかの国から手に入れたのか。

それを知るのはほんのわずかな人間だけだ。

「それにしても、このヘリはすげえな。ここまで静かだと夜間戦専用機にでも開発されたのか？」

操縦席に座るパイロットに話しかけるが、返ってきた答えは由の期待した答えではなかった。

「すいません。私も急遽要請されたものでこれは初めてなんです。

操縦はあらかた変わらないといわれたもので。しかし、すごいですね。ここまで静かとは。」

「こんなに島にご奉仕してやってんのにぜんぜんわからねえや。あたしらはまだまだ、下っ端ってことか。」

ヘリは静かに島を出る。

「チャンスは今しかないな。」

遠方からの狙撃がとまり、数人が中へ入っていった今しかない。

狙撃はだいたいあそこら辺のビルとかからだろう。と、予想を立てて隠れながら進める道を探す。

急がないと、もしかしたら取り返しのないことになる。

「詩焉、迷ってる暇はないぞ。」

「ちよつと。」

「詩焉さん。」

お前は……。

ええい。どうなってもしらないからな。

できる限り物陰に隠れて前へと前へと進む。

こんなに怖い思いをして走ったのは久しぶりだ。

少年時代に、後ろの暗闇からなにかがでてきてくるかもしれないという、自分が作った想像の化け物とは、比較できない。

もちろんこの例えは、俺と他の人が唯一同じ意見で、一番理解されやすいであろうものだろうという予想で出した例で、もっと怖いかったことは他にいろいろある。

一歩一歩の感覚が怖い。

ただ走るだけなのに、どうしてか転びそうだ。

気が狂いそうで吐きそうだ。

今狙撃者に命を狙われてると思うと、心底怖い。

あと、少しで入り口だ。

入っても安全という保証はないが、それでもかまわず走りこむ。

「アリ、頭はどいつだ。」

「ちよつと待て、えー、つと、今日日本刀もってる女と戦ってるやつだ。」

やばい。

劣勢だ。

殺される。

止めないと。

後腐れ。

走れ。

行動が単語単語で、浮かび上がってくる。

さっきのフラッシュグレネードで敵がひるんでいるので、簡単に近づける。

それでも起き上がっているやつらはこちらに意識を向けてくる。

怜火が後ろから援護してくれ、相手を狙い撃つ。

一段高い所にいるそいつの後ろに回って襟をつかんで思いっきり引く。

どうにかナイフの危機からは逃げしてやれた。

しかし、スイッチを押す手がスイッチにとどく。

あれ？まさか、今俺が引いたから殺せなかった？押しちゃった？

爆音が響く。

俺はまだ赤ん坊のときに、日本人の両親に捨てたれたらしい。

そんなことは、俺を育ててくれた人たちと俺がぜんぜん違ったからすぐに分かった。

物心付いたときから、自分と他人の違いは分かっていた。

だから親も俺が納得できるようにすぐに話してくれた。

戦場跡に一人置き去りにされていたって。

そして、こういう紛争が多いところに子供を捨てたりする日本人がたくさんいることも。

でも、怨みはしなかった。

そんな国で生きていくならこの国で生きたほうが人としてまじだ。だから、銃をとった。

育ててくれた両親に御礼をするために。

一生懸命働いた、いろんな人から知識を吸った。

でも、お願いはかなわなかった。

紛争地帯に住んでいるんだ。

当たり前だ。

誤爆で家が吹っ飛ぶなんてことは良くある。

それが、自分の身に降りかかるなんて思ってもいなかった。

よく嗅いだ火薬のにおいや、人の焼けるにおい。

どうしてかいつも以上に鼻に付いた。

俺は遠くへ働きへ行っていたので、どうにかその被害は免れた。今までに感じたことがない絶望感。

初めて何か大切なものを失ったとき、俺が殺してきた人たちも同じように思っていたのだろうか。

分らない。

それを考えたら、銃をもてなくなる。

……話がそれだな。

育ての親が、死に掛けている最中に俺に渡してくれたものがある。

「来るべき時に開ける。」

よく分らない小さな箱だ。

まだ、開けていないから何が入ってるのか分らない。

どのタイミングがその来るべき時なのか分らない。

まあ開けたいときに開ければいいか。

結局何が言いたいのかは、分らない。

自分の頭の仲でさえも、まだまとまってない。

とにかく、俺が何かを貰った事と、そんな子供時代を生きたことを覚えてくれて、思い出してくれればいい。

はずしたか。

身誤った。まだ、味方が残ってたのか。

スイッチを！！

もう一步を踏み出そうと体重移動を体が始める。

体が、筋肉の一本一本がとてもゆっくり動くように感じる。もうちょっと、もうちょっとで。全てがスロー再生のように流れ始める。

今にも攻撃可能範囲内に相手が入りそうだ。もうちょっと。

もう一度刀を握った手に力を込める。

しかし、遅かった。

外から、爆発音が響く。

踏み込みをやめず、外に意識を集中させないようにする。

しかし、爆発の事実とその爆音に無理やり意識を持っていられる。間に合わなかった。

重過ぎるプレッシャーが急になくなり、思わず刀を構える手から力が抜ける。

私たちの島が・・・堕ちた。

厳しい現実を突きつけられた。

待てよ、いくら安全な場所に逃げてきたからといってもこの程度の爆音では済まされないはずだ。

一瞬敵から意識をそらしてしまったことを後悔して振り向く。

逃げられた。

なんていう失敗。

敵を打ち損じた上に、逃がすなんて。

「全員、今いる者たちを拘束後、速やかにヤツを探せ。」

急いで外に向かう。

確かに爆発の後らしき煙は出ているが、それも数本しか登っていない。

どういうことだ。

島を落とせるだけの爆弾があつたんじゃないのか。

ここに来て不発ということもおかしい。

ジャミングに対して完璧な対応までしていたのに。

どういうことだ。

ふと、思いにふけるが敵を逃がした事実やはり重い。

この気持ちは厄介だ。絶望に打ちのめされたわけでもなく、単に喜べるわけでもない。怒れるわけでもない。ただやるせない。自分の無力さに腹が立つ。しかし、今後を考えると、その怒りは沸騰してくれない。いつそ壊れそうになるまでになつてほしかったのに。

引き摺り下ろした勢いで、工場の奥へと逃げ切る。

爆音からして、自治団あたりがうまいこと爆弾を処理したんだろ。

おかげで被害は小規模に収まった。

奴らがそっちに気を取られている間に急ぐ。

放棄されてからだいぶ時間が経つのかドアは錆びて重い。

しかし、相手も同様にてこずるので少しずつ細工をして時間を稼ぐようにする。

「アリそろそろ終わらせないと危ない。」

今できる限り全ての小細工を終え、アリに全てをまかせる。

「革命なんて本当にできると思ってたのか？」

「革命か。確かに世界を変えようとしたさ。」

「こんな方法でか？」

傷口が傷むのか、顔をしかめながら話す。

「これは避けてはいけない道だ。今後俺たちが動くためにはこの計画にのるしかなかった。」

「とんだ革命精神だ。」

「何とでも言え。けどな、表側ばかり見てる奴らがいるということをお忘れるな。都合のいい世界しか知らない奴らがいることを忘れるな。俺たちが生きてきた世界を否定する奴らがいることを忘れるな。」

さすが自称革命家だ。妙な説得力がある。

「けどな、お前みたいな奴らがおじさんたちを殺したんだ。あんなにいい人だったのに。どうして、裕福な人をわざわざ巻き込もうとするんだ。」

「だからいつてるだろ。我々が今後行動しやすくするためにこの計画に乗ったと。それに犠牲なしにはこの世界はなりたないんだ。」

「ふざけるな。なんで・・・」

そのまま出るはずの罵声をさえぎって、アリを止める。

「アリ、このまま怜火と一緒に奥にいけ。」

「詩焉さんはどうするんですか。」

「時間を稼ぐ。」

「なら、私も・・・」

怜火の気持ちはすぐくありがたいが、ここは俺が止めないといけな

い。

そもそも俺がアリたちのことを連絡したから悪いんだ。

「行け、怜火。アリを頼んだぞ。」

奥でギシギシと扉がきしむ音がする。

行っただ。

装備の点検をして、覚悟を決める。

「私がこんなに面白そうなことに参加しないんでも？」

後ろから頭を鷲づかみされた。

「久しぶりだな。」

まったく気配を感じ取れなかった。

心臓がバクバク、ドキドキだ。

「まったく。フフ、そんなに硬くなるな。今回は君に危害を加えたりしない。」

「やりすぎるなよ。」

頭をくしゃくしゃに撫で回される。

誰にでも分かるだろう。こいつから発せられる身の毛が逆立つような感覚を。

ネコにつかまったネズミの気分だ。

「弁えてるさ。殺さず逝かさずだ。私もここで生きたいからな。」

別の道から奥へ進む。

再びあちこちでドラビが開く音がする。

そろそろか。

扉が開くのと同時に、殺気が部屋を満たす。

「こ、こいつらは何をしてるんだ。協力を条件に囚人を逃がすなんて。しかもこんな危険な奴らを。」

監視モニターから島の囚人収容施設の様子を見る。

電話を手に取り番号を打ち込む。

「館長どういことだ。」

「浅海から連絡があった。爆弾解除を条件に釈放してる。」

あの女あ。

受話器を持つ手に自然と力が入る。いくら幹部の方からじきじきに配属されたからって、調子に乗りやがって。計画が狂うじゃねえかよ。

「俺がこの区の責任者だ。こんな勝手に許されると持つてるのか？」

「なら、責任者は何をしてるんだ。島に爆弾が仕掛けられたと言うのに、出世ばかり気にして。そんなんだからあいつらになめられるんだ。」

あまりに激しい怒りが度を越すと暴れ狂うのではなく逆に人は冷静になる。

「それは島の反逆へと見受けるぞ。」

「適材適所というものだ。ここじゃ力のない奴らはすぐに下げられるだろ。」

溜めてた怒りをぶちまけるように受話器を叩きつける。

俺が老後も楽して生きるためには、もっと金が必要なんだ。

普通に働いたって足りねえんだよ。

「反撃から脱出へ」

1対1のタイマンで最も重要なことは先制攻撃を決めることだ。

他の誰がどう言おうとも、今までの経験により、それがベストだと俺は信じている。

だからドアが開いた瞬間そこに誰がいようと全力で走った。

走って付けた勢いを殺さないまま足を高く上げとび蹴りを食らわす。

はいった。・・・いや!?

人の肉の柔らかさではない何かを足の裏でとらえた。

直撃していないことから、大したダメージは与えられていないだろう。

ここで再び1対1で最も重要なことのその2だ。

それは、相手に先制攻撃をされたら絶対に防ぎ、そのまま反撃に持ち込むこと。

つまり、相手の攻撃が来る。

急いで距離をとるためにバックステップを踏むが、相手の踏み込みのほうが数段早い。

今更だが、相手の姿を理解できた。

さっきの男装、麗人。それから帯刀。

つまり、とび蹴りは刀の鞘に防がれたのか。

そんなことはどうでもいい、と頭をリセットする。

まずは、振り上げられた抜け身の刀をどう防ぐかだ。

警防は出してる時間がない。

一か八かで、前に出る。

刀の間合いは腕の先からだ。

つまり、間合いを極端に詰めればどうにかなる。

恐怖ですくむ体に鞭打って前に出て、腕をつかむ。

よし。このまま力押しになればこっちのほうが有利・・・ぐはああ

あ。

膝が見事に鳩尾を捕らえた。思わず掴んだ手を離し、後退する。そこは普通力の競り合いだろ。

しかし、反撃は終わらない。

カンフー映画でよく見るような回し蹴りが視界の外から襲ってくる。

とっさに構えて首への直撃は逃れるが勢いに負け床へと滑り転ぶ。

さらに、追撃は終わらない。

相手が立ち上がるのを待ってくれるのはあくまで試合の世界の話だ。勝負の世界では命を取るか取られるかだ。つまり、起き上がる前に片をつけに来る。

思いつきり転がり振り下ろされる刀をよけ、警防に手を伸ばす。

体勢を立て直すと同時に激しい息切れに襲われる。さらに、ここ最近の気温上昇により密閉に等しい工場内部はサウナ同様だ。

それなのに、相手は汗ひとつかいてないし、今のところ息も切らしてない。

まったくだ。まったくやってられない。

休む隙を与えないつもりか、もう踏み込んでくる。

相手の出方を見ないのか。それとも俺なんかの出方は見る必要すらないのか。

どっちにしろ、どうでもいい。

振り下げられた刀を払い、その払った方向に体を向け回し蹴りをする。

しかし、何も捕らえられなかった足はただ空を切る。

次に突きを交わして足払いをするが、簡単によけられ胸へと思いけりをいれられる。

蹴られた勢いのまま転がり立ち上がる。

「やつはどこだ。お前たちは完全に包囲されている。諦めて死ね。」

「俺は一般人だ。そいつらの仲間じゃない。」

「なら、さつさと居場所を教える。そうすれば見逃してやる。」

「もう少し待ってくれ。」

「時間切れだ。」

再び戦火は燃え広がる。

適度に時間を稼がないと。

振り下ろされた刀を再びなぎ払おうとするが、本気じゃなかったら間に合わなかっただろう。

攻撃もそこからは、さらなる技から技へと広がりどこからどうくるか分からない。

さつきまでとは明らかに動きが違う。

聞くこと聞いたから本気モードか。

腕を浅く切られ、そのまま後退するが距離を取らせてくれない。殺る気でいかないとこっちが殺れる。

無理やり距離を取るために銃を取り出し狙いも定めず乱射する。

少し距離を取ったところで狙って撃つ。

確実に捕らえた。

しかし、銃弾はとどかない。

な！？どうして。

もう何発も撃つが銃弾が相手を捕らえることはない。

外してるわけがない。まさか飛んできた銃弾を斬ってるのか！？

無駄だとあきらめ、逃げるために銃を投げ捨てる。

すまない兎兔。つと心の中で呟くがそれどころではない。

こちらにも動きを変え相手の攻撃に真剣に対処する。

しかし、腕がついていかない。

どんどん体に浅い切り傷が付いていく。

まずいな。

相手が振りがぶった。

ゆっくり、ゆっくり、刀が振り上げられる。

そして刀身が消える。とっさに構えたが、何が起きたか分からない。

ただ、ただ、警棒が根元から切り落とされている。

なにが・・・どうして・・・どうしてだ。わけの分からないことに意識が混乱する。どうしても考えがうまくまとまらない。

一瞬の意識のラグを狙われ突きが放たれる。
防ぐものがないこの状況で。

ハズレか。

大した手ごたえもない。

少女を中心に広がるのは無数に等しい倒れこんだ人の山。
おびただしい血の海に彼女は平然と立つ。

まるでそこが彼女の居場所のように。

しかし、彼女自身はまだ誰の息の根を止めてはいない。

先の攻撃で命を失ったもの以外、すべて関節を外したり骨を折ることによって、戦闘意欲と共に戦う力を奪い去った。

彼との約束のために。

倒れこんでいる人々はテロリスト達を抜きしかりとした訓練をつんだ本当の戦士である。

太い腕はねじ伏せられ、鍛えてきた全てを否定した。

島で最も強い存在を彼女はいつも簡単に否定した。

向こうが当たりか。

さてさて、詩焉は大丈夫かな。

死なれては困るし、戻るか。

「だああああああ。」

一瞬のスキを見て後ろからナイフを振り下ろす。

「さっさと撃てばよかったものを。」

しかし、彼の攻撃はとどかない。

手首をひねられ、簡単に転ばされてしまう。

そのまま腕を逆くの字に折り曲げ足をつぶす。

「もつと体重移動をしっかりとしろ、だからこんな簡単に転ばされるんだ。」

まあこの程度の相手ならいいハンデだろう。

いくら経験をつんで、完璧な連携を取れたとしてもバケモノの相手はバケモノにしかできない。

一般人では相手にならんさ。

そういい残して彼女は血の海を駆ける。

「お前が裏切ってくれたおかげで、たしかにあの紛争はなくなったけどな、また新しい紛争がおきるのは目に見えているし、この島で新たに戦いが起きている。お前はただ戦火を広げただけだ。」

「言ってるだろ、目先の事を見るんじゃない。将来のことを考えてるんだってな。」

「だからって、犠牲は厭わない。それが通じると思うなよ。」

「そういう考えが世界を、人の心を蝕むんだ。自分は手を汚したくない。関りたくない。いつだって人は自分だけを守ろうとする。」
傷ついた腕を思いっきり踏みつける。

「なら、お前の心はとうの昔に喰われてる。」

思いっきり踏んだのに、声ひとつ出さない。訓練をつんだ本物だ。八つ当たりの暴力では、もうどうにもならない。

そんなもので壊せるほどもろい覚悟ではないらしい。

「もう、思想の話は十分だ。爆破も失敗したしもう何もできないだろ。スイッチもこつちで抑えた。」

「だが、遅い。」

「もう助からない。」

「こんなことがひとつの作戦で構成されてると思うなよ。必ずつぶせるように手配してある。」

「もう終わったんだ。」

「お前はこの島のことを分かってない。長年この島を守ってきたせいで幹部はもうスタスタだ。金さえ出せば簡単に物事が運ぶ。いくら頑張ったって人は人で、欲望には勝てない。」

「そういうことか。」

ようやくバラバラのピースがまとまり始めた。

頭のねじが外れたかのように、急に高らかに笑い始める。

「俺たちがここにこれたこと、お前たちが攻撃されたこと、爆弾がギリギリまで解除されなかったこと。まあ爆弾が解除されたのは想定外だったかな。まだ、腐っていない奴らがいたのか。」

「協力者がいたのか。」

「お前たちの負けだ。これで俺たちの革命が始まる。」

銃を構える。

かっこつけてるわけじゃないが、両手にはそれぞれ銃が握られている。

片方は詩焉から渡されたここで生きるための銃。

もう片方は、今まで使ってきた人を殺すための銃。

どちらの引き金を引くべきか。

迷う。迷う。迷う。

「何を迷っている。そうやって自分のことを守ろうと必死になってるんだろ。他人のことなんてどうでもいいんだろ。」

革命家と言う名高い詐欺師。

いや、革命と言う詐欺にだまされた被害者を、俺はどうすればいい。

どうすれば。

相手だつてこんなところで死ぬつもりはないだろう。きっとこの会話、単語一つ一つにきつと何か隠している。

迷ったまま引き金に手をかける。

自分のことも、他人のことも考えないまま。

ふと、後ろに気配を感じる。

振り返ったと、同時に銃声が轟く。

刀が、相手の牙が今にも俺を食いちぎろうと向かってくる。

何故だか無性に時間が経つのが遅い気がする。
転ぶ瞬間景色がゆっくり過ぎ去るように。

相手の表情は何一つ変わらない。
憎たらしい。

まるで、俺のことなんか敵としてみていないように。

相手の動きはゆっくりだが着実に俺を殺すために動いている。
怖い。

体が急に強張る。

しかし、死ぬわけにはいかない。

なら、俺はただ転ぶ自分をゆっくりと見ているなんてことなんてしない。

精一杯の力を振り絞って強張った体をねじる。

それでも左肩を痛みが襲う。

痛み。どっちかっつていうと熱い。

刃物で切られた傷は熱く感じる。

それは血液のせいなのか、刃物と肌の摩擦熱かは分からない。

けど、ひとついえるのは肩が無性に熱いことだけだ。

ねじった勢いを殺さないまま回し蹴りをして時間を稼ぐ。

簡単によけられる。

もう少しだけ。

逃げる時間を、隙を作らないと。

この暑い気候のせいで薄着だから自分の腕がどうなってるかよく分かる。

幸い切り落とされるほど斬られてはいない。

が、流れ落ちる血の量を見ると決して良い状況とは言い切れない。

相手がもう一度構える。

正直避けきれぬだろうか。

自信なんてほとんどない。

でも、何もしないわけじゃない。

追い詰められたからって何もしないわけにはいかない。

今俺が逃げるためにできる最良のことを考える。
ジリジリを距離が迫る。

思いっきり左手を振り血を飛ばす。

一瞬でいいから目をつぶせればいい。

一瞬でいいから隙ができればいい。

相手の横を思いっきり走り去る。

抜けた。

そう思いたかった。

右の太ももがほんのわずかに熱いと思ったとき、体は地面に迫っていた。

あと、半歩前にいたら。

太ももがほんの少し、少しだけ斬られていた。

「逃げ切れるなんて思うな。」

靴底に隠したツールナイフを投げる。

金属同士がぶつかる音がしたから防がれたのだろう。

確認もせず逃げる。

「言っただろうが。」

怪我をした俺のスピードでは相手から離れることもできない。

「詩焉、頭を下げる。」

開かれたドアから天使の顔をした悪魔が入ってきた。

うれしいようで、複雑だ。

「ん!？」

流石に不意打ちの弾丸はすべて切り落とすのは不可能らしい。しかし、当たることはなかった。

「そいつを殺させはしないさ。」

片手には逆手に持ったナイフ、片手には銃を構え奴に近づく。

「怜火、そいつに接近戦は・・・」

俺の心配なんて無駄だったのか、互角いや、それ以上に戦う。

逆手に持っていたナイフを普通に持ち直して攻防を一度に行い華麗に突き、華麗にはじきそらす。

銃を投げ、相手の回避行動を狙って回し蹴りをする。

驚いた。同士に自分が急に小さく思えた。

自分がどんなに頑張っても勝てなかった相手を意図も簡単に畳み込んでしまう。

「覚悟が足りないからだ。」

俺の心を読んだように話しかけてくる。

もう一丁銃を取り出し適当に乱射して相手と距離を取る。

「大丈夫ですか、詩焉さん。」

天使の顔した悪魔から、天使の顔した天使にもどった。

いつもの、怜火に。

「助かった。ありがとう。」

「腕!!」

そういつて自分の服の一部をナイフで切り取って止血をしてくれる。

情けない。

さっきのありがとうにも、気持ちが入らない。本当にだらしない。男としても人としても。

「アリを連れてここから出よう。流石にもう無理だ。」

振り返った瞬間俺は引き金を引けていなかった。

やられた。

何の疑いもなく、ただそう思った。やり残したこと、やりたかったこと思い返して見るとそんなにない。

ただ、流れに逆らわずに生きてきたから今回の事件も流れに身を任せたまま、こういう結果になって、何もできなかった・・・何もしなかった自分に腹が立ってその八つ当たりをこいつらにして、自分の行動を正当化してただけだ。

死ぬとなると、どうも分からない。

ただ、この時間が永遠に続くかのような感覚に襲われる。

「アリ!!」

名前を呼ばれてやっと意識がはつきりする。

撃ったのは詩焉達か。

怪我をしているのか、怜火に肩を借りながらこちらに向かってくる。

「悪い。」

「こつちもだ。まだ終わってないみたいなのに、時間切れだ。」

残念だとは思わなかった。

もし、このまま話していたとしてもどうも転ばなかっただろう。

相手を説得するほどの切り札はなかった。

相手に丸め込まれるような最悪の事態にならなかったただけでした。

しかし、自分とのけじめのために再び銃を構える。

自分でも説明のしようがない気持ちで引き金を引く。

引き金を引くことに迷いを感じたのはいつぶりだろうか。

私を退かせるなんて、バケモノじみた奴がいたものだ。

別に自分の力を過信しているわけではないが、自分の実力がどれほどのものかはちゃんと理解している。

気配が消えたことを察知し急いで後を追いかける。

負けたというのに不思議と嫌な気持ちではない。この胸の高鳴りは、きつと喜んでいるのだろう。心の底から何かがつつと湧き上がる。自分より強い存在がいたこと。そして、そいつに勝つためにこれからの日々、強くなることだけを考えることができること。

今度あったときはしっかりと戦ってみたいものだ。お互いに命を懸けて。

自然と軽くなった足で扉を開けると、2人の大人が横たわっていた。

銃を握ったまま倒れているほうはまだ息があることを確認すると銃だけ破壊してそのままにしておく。

こいつは……。

仰向けにして特に外傷がないことを確認し、脈も確認して一息つく。

こいつからは聞かないといけないことが山ほどある。

特に島のことについてだ。

どんな手を使っても吐かせよう。

大方ジャミングの効果も切れたことだろうと時計をしてみるが、デジタル時計は動いていなかった。

・・・外してくればよかった。よく、考えてみれば全ての電子機器に影響を与えるんだったな。

深いため息をつき、仲間に連絡をする。

「こちらで目標の確保に成功した。各自現状況の報告をしる。」

イヤホンから変なノイズが入っていないと言ふことは正常に作動していると言ふことなんだろう。もしくは完全に壊れているかだ。

相手から反応が返ってくる。ちゃんとした軍事製品はジャミング対策がしっかりされているのでありがたい。

「・・・死者は出ていませんが、隊員の7割以上が戦闘不能状態です。」

「なに!？」

「すいません。」

「敵は？」

「テロリストを思われる連中は全員抑えました。生存者だけは確保してあります。」

「分かった。始末は後でおこなってもらえばいい。」

「・・・やったのは少女か？」

「・・・面目ないです。」

部下を責める気持ちなんて、もう自分の中にはなかった。

自分の中でフツフツと、こみ上げていたものは今はもう沸騰してい

る。

歓喜が。歓喜が狂喜となっていると言っても過言ではないほど、自分の中が騒ぐ。

「後は任せる。」

「分かりました。」

横になった男を引きずり外へと出る。

こうしたのはあいづらだろう。この戦場で非殺傷弾なんて使ったのはあいづらだけだ。

ふと、転がっているほうの銃を拾って中を確認すると実弾が1発も使われていなかった。

賢明な判断だ。

こんな所だからこそ、我々は良くする為に全力で犯罪を防ぐ。そして罪を犯したものを許さない。今はまだ胸を張っていられないが、近い将来きつと、まともにしてみせる。

「由。」

「なんだ。」

ようやく連絡が取れた。

「感謝する。」

「何のことだ？」

「とぼけるな、囚人を使って爆弾処理させたのはお前だろ。」

「ばれてたか。まあ専門家に任せるのが一番だ。それに今回は人手不足だったからな。」

「今どこだ？」

「ちよつとばかり空の上。」

「そうか。」

「訳きかねえのかよ。」

「お前がドンパチ差し置いてサボることなんかありえない。もうひとつのほうのあてが付いたのか。」

「ああ。逃げられる前に殺ってくる。それとなあ、今から行くところは法律がしっかりしてるからそっちで、終わったらサポート頼む。

「分かった。」

廃棄工場を出て三月の店を目指す。

出血は止まらず怜火が巻いてくれたところからは血がたれている。

「大丈夫ですか、詩焉さん。頑張ってください、もうすぐですから。」

「ああ、心配ない。悪い。」

自分が足を引っ張っているせいで、早く店に帰れないことが本当に悔しい。

何度心の中で先に行ってくれと咆えたことが。

しかし、その度その行為自体がさらに皆の足を引っ張ることだと自覚する。

「背負ったほうが早いな。乗れ詩焉。」

「悪い。」

怜火が道を案内し、自治団がいなか見回るように先に行く。

幾重にも路地を曲がり、ようやく三月の店までやってくる。

数十分がどれほど長く感じられたであろう。

その間どれほど自分は惨めであっただろう。

「三月さん!？」

「れーちゃん、お願いだから寝かせて。」

いつもならありえないほどのあわてたような足音で店に入ってくる。

それに気づいたか三月がソファから身体を起こす。

それと同時に目を見開く。

疲れてソファに沈んでいたのが嘘かのように飛び起き詩焉へと駆け寄る。

「どうしたの!？」

「どじった。それが・・・」

「そんなことは後でいい。待って今轟先生に連絡するから。」

そういつて嵐のように店の中へ戻ってしまった。

「轟先生？」

「たまにお世話になつて腕利きの先生だ。もぐりの中ならきつと一番つて言つても差し支えないだろ。」

「そんなすごい人なんですか！？」

「性格に難があるけど。」

連絡を終えた三月が奥から駆けて来る。

「こつちにはこれないから診療所のほうに来てだつて。」

「分かった。ありがとな、三月。」

無事な腕で軽く礼をして店を出ようとすると、怜火が傍へとやってくる。

「私も行きます。そんな状態じゃ危ないですから。」

これ以上迷惑をかけたくなかったが、何を言つても聞いてくれないだろう。それに助けてくれたのは怜火だ。

「行こうか。」

俺達は三月とアリを残して店を出る。

「あんたが三月？助かった。」

「いいよ、元はこつちのせいだから。」

後ろめたそうにことを話す。

「詩焉から連絡があつてね。島でドンパチしそうな奴がいるつて。」

それで前々からテロリストの情報を自治団が探していたから、網の強化の為に教えたの。」

「その時は、容疑者つて送つたんだけど。自治団に伝わっていた情報にはテロリストつてなっていたの。言い訳するわけじゃないんだけど、外部から介入があつたみたい。私の注意不足でごめんなさい。」

日はだんだんと傾き始め店内はオレンジ色に染まる。

しかし、なぜかそのオレンジ色が無性に悲しく、寂しく、つらいものに見えてしまう。

「なんと言つか、あそこに別に戻りたいわけじゃないけど、部隊にもいい人はいたし、俺はいちお無事なんだし、なんていつていいか分からない。複雑な気持ちだ。」

「本当にごめんなさい。」

ふと、ふと叔父さん達から貰ったものをあけてみる。

数枚の写真・・・文字の書かれた紙切れ。

そこに移るのは赤ちゃんを抱いた日本人。

なんとなく分かっていった。だからこそ開けるのを避けていたんだ。

「情報屋なんだろ。これ調べてくれないか。」

写真を渡す。

「あと、なんて読むんだ、これ？」

名前らしき物が書かれた紙切れを渡す。

話して聞き取れることはできるが、読み書きはできないんだ。

それにこの紙ボロボロでよく今までもったもんだ。

「おおがみ とほり
大神 帳」

「そうか。ありがとう」

そう言つて紙をクシャクシャに破り捨てる。

「忘れてくれ。」

「脱出から治療へ」

町のとある一角の寂れた建物。

そこに島一番と言っても差し支えのない名医が住んでいる。

扉は錆びて重く窓ガラスは全て割られていて雨風を防ぐという建物としての根本的な価値すら危なかったが。

無事な片腕で重いドアに手をかけて思いつきり引く。

扉を開けると実は最新設備の整った綺麗な部屋が広がっているなんて夢のような展開はない。

ホコリまみれの床にはガラスやプリントが散らばり本棚などが倒されひどく荒れている。

「本当にここなんですか？」

心配そうに怜火が聞いてくる。

たぶん、俺の腕の傷のことを心配してくれてるんだろう。流石にこのまま血が止まらなかったら危ないだろう。

「大丈夫だ。」

そういつて床に目を配る。

手探りで地下室へつながる床を探し出し引き上げる。

「島一番だと客が多くて困るらしくてね、それでこんな所に隠れたり、居場所をあまり悟られないように転々と移ってるらしい。」

扉を引き上げるとあたりにホコリが舞い、思わず舞い上がったホコリを払い咳き込む。

出てきた階段を降りると、そこには上とはまるで違う世界が広がっていた。

上の環境とは180度違いそこにはホコリひとつ落ちていなかった。

最新機器がそりい真っ白な空間がそこにあり、いかにもその場に合う人物がそこにはいた。

真っ白な空間に真っ白な白衣を着て彼女はそこにいた。

「おめでとう詩焉、君がこの施設の最後の患者だ。」

「どうも、轟先生。」

島一番と呼ばれる彼女はあまりにも若かった。

年はどう見ても20代前半。

「そちらは？」

「怜火です。はじめまして。」

「どうした？」

「いえ、あの・・・若いなって思って。島一番のお医者さんって聞いたのもつと貫禄のある方だと。」

「島一番は言いすぎだ。確かに医者として私は若い方だろう。しかし考えてみる、手術をするために現代文や古文、物理に数学の知識がいるか？一人前の医者になるためにはかなりの時間を要するが、一人前の手術をできるようにするにはそこまで時間は要しない。そういうことだ。・・・それはそうと」

急に顔を近づけて怜火の顔を覗き込む。

ふむふむ、と何かつぶやいて自分で勝手に納得する。

「これは、これは、なかなか面白いな。が、今は詩焉だな。さあ寝る。」

診察台を指出す。

素早く無駄のない動きで消毒と麻酔を済まし縫合を始める。

「ドジをしたにしていはいぶんと派手にやられたな。義久が見たら驚くぞ。」

「・・・気をつけます。」

こんな会話の間にいつの間にか縫合は終わっていた。

流石に手馴れている。丁寧に且つ早くこんな傷では手術と言言葉にすら当てはまらないんだろう。

「お代はいつも通り荷物の運搬を頼む。」

「喜んで。」

「それと、怜火君もだ。」

まさか自分に会話の矛先が変わると思っていなかったのか慌てふた

めいている。

「わ、私ですか？」

「そうだ、実に興味深い。こつちに来てくれ。詩焉は先に歸つてろ。クスリはそこにおいてある。あまり痕跡を残していくなよ。」

唐突に一人残され戸棚に置かれたクスリを手に取り悲しく地上へ上る。

「悪いけど、怜火先生がそういつたらもう止められないから最後まで付き合つてあげて」

「ちよ、ちよつと詩焉さん？え、ちよつと先生え？え？ええええええええええ」

抗生物質や鎮痛剤、化膿止めなどなど深い切り傷の後には必要なクスリがきちんと日にち分に分けられて置かれているのをみて最後の最後まで流石だと思った。

抜糸は自分でやれってことかな。

某国上空。

「領空勝手に犯してから10分経って戻らなかったら逃げるよ。」

「お気をつけて」

「お」

マンションへロープを使い降下する。

地面に近づくに連れてふつつと歡喜がこみ上げてくる。

戦える、命をかけて戦えるという事に対しての歡喜。狂っているのは自分でも十分理解している。しかし、自分を抑えきれないのだ。目の前にエサを出された野良イヌのように黙ってはいられない。

エサに飛びついて貪り尽くせと魂が叫ぶ。

コッソリ。

軽い音とともに地面に降り立つ。急いで階段を駆け下り目的の階に降り立つ。

畏は・・・さすがにないか。いちおここは世界トップレベルの安全な国のひとつだ。万一一般人がかかったらとんでもない大騒ぎだ。大手の会社の広さとあまり変わらないマンションその階ひとつが丸々部屋となっておりよほど地位のある人物しか住むことはできないだろう。

先にエレベーターへ向かい電子パネルを破壊する。

これで階段以外でここまで上がってる方法はない。

時間を稼ぎ、部屋の前へ急ぐ。カギはもちろん最高レベルの電子ロック。しかし、そんなものをいちいち破っている時間はない。

V字爆弾を壁に張り付け部分的にカギの部分を吹き飛ばす。

警報が鳴るが気にせず進む。

「無駄に広れえんだよ。つたく。」

ドタドタと足音が聞こえる。

焦ってるな。飛び出してきた人物を問答無用で撃つ。

少し進むとパソコンなどで埋め尽くされた部屋に着く。

「昼真つから部屋にこもって、友達はパソコンですかあ？」

「誰だ、あんた。ど、どうしてここにいるんだよ。」

「てめえらみたいなガキがふざけ半分でちゃちゃ入れていいような場所じゃねえんだよ。」

1人が銃を出してこちらに向けてくる。ガクガクにぶれて照準はまったく合っていない。

正直止まって見える。撃つこともないんだろう。ただ威嚇の為に隠しておいた程度。取るに足りない。淡々と単語が浮かぶ。そして、単純作業のように相手より早く引き金を引く。

「動くな！」

逃げるために一番に動いた奴をすかさず撃つ。殺す気もなければ、急所も外す気もない。ただ銃弾を撃ち込む。ザコの為にいちいちどこをどう撃つかなんて考えてられない。

「聞きてえことは2、3ある。まず裏切りものはどいつだ。」

組織としてこの世に存在する以上裏切りや停滞、質が下がることは

仕方がないことだ。だからそれがあつたときには全力で制裁を加え質を上げなおす。

他の部屋に人気はない。たぶんここにいるので全員だろ。時間を確認して一人一人の顔を眺めるように銃口を向ける。

「時間がねえんだよ。言わねえなら別にこつちで探し出すからかわねえよ。ほとんど予測できてるしな。」

「た、頼むよ。か、金ならいくらでも払える。助けてくれ。」

火薬とともに人の命が弾けた。

本当に末期だな。どうして金持ちは命の危険になると金の話をするんだか。

反吐が出る。

「おい、てめえ、助かりたければさっさと話せ。どうしてこんなことをした？」

「は、話しますから。う、撃たないでくれ。依頼があつたんだよ。

あんたらに攻撃を仕掛けろつて。マニュアルまでしっかり用意して・・・」

不意に銃声がとどろく。

身は危険を感じ硬直しようとするが本能で後ろに下がる。まだ、残っていたのか？そんなはずは・・・降り立つときに感じた歓喜が再び込みあげてくる。しかも、1人じゃない足音から推測するに3人3人も。まさか3人も見逃していたなんて、いや、3人もが自分の感覚から逃れられるなんて期待以上だ。

こいつらのことか。気配をもらさせずに潜んでいたのか。

そうでないか。ああそうだ、このためにせっかくここまで来たんだ。ガキの相手して、ハイ、おしまいじゃあすまされねえんだよ。

まどつろしいなあ、おい。

広いおかげで部屋の中を思いっきり走り回れる。いちいち回りに気

を使って思いっきり動けないことがなくて助かる。

しかし、それは相手にも同じことが言える。

障害物を盾にして隠れ、相手の残弾がなくなるまで耐える。そして、装弾している最中に前に出る。

相手が焦る気持ちはこちらにも空気を伝って伝わってくる。それを全身で感じ取る。

とった！！

そう思いさらに一步前に出ようとするが一瞬ほんの一瞬感じた違和感によりそのまま前に出ず横へ転がる。

やっぱりまどろっこしい。

1人をやろうとすると後の2人がその1人の装弾の時間を稼ぐためにサポートへ入る。もし、そのまま1人を殺そうと前に出れば確実にこちらにも痛手を負うだろう。

相手は完璧な連携を組む相当な手馴れた。時間をかけてじっくり見ればその穴を見つけることができるだろうが、今は時間がない。時間を確認すると残り4分は切っているのが現状だ。

つたく、残り時間がねえなあ。

ヘリが出てしまえばまっているのは身元をを悟られないために自殺という道だけ。想像しただけでも嫌気がさす。生きるために戦ってきて最後の最後で自殺なんてやってられない。

考えている時間はない。こちらから攻めなければ囲まれてしまう。

どんどん追い込まれる。しかし決して焦ってはいない。寧ろ本当に喜んでいるところだ。

さて、どうするか。3方向から囲まれ一人を狙いにいくともう2人に狙われる。腕は2本だ。どうやったって同時に狙える相手の数は2人が限界だ。

最小限の動きで最大限の攻撃をする。言葉で言えば単純なことだ。同士討ちはまず無理だな。2人なら何とかあったものの3人ならできない。2人のときは片方へ狙い定めこちらが動くと、相手は敵と仲間を同射線上におかなければならない。しかし3人ならその3人

目は別の方向からこちらを狙える。冷静に考えれば考えるほど分らなくなる。

何か、何か奇抜な作戦が必要だ。相手の不意をつけるような誰も考えないような、狂った作戦が

散らかってしまった室内を見て、とっさにひとつの作戦を思いつき、上に残ったヘリに連絡を入れる。

時間は1分を残すのみ。失敗しようものなら手詰まりだ。

この状況を打破できるだけの實力があるのか、自分で自分を篩いにかける。極限まで自分を追い込んだ。残すところは生き抜くための新たな開花だけだ。

自分の力をよりいっそう伸ばすには極限に自分を追い込み、そこから自力で抜け出すことだ。

部屋を駆け抜け、相手のうち2人を同射線上に導く。今まで通りなら3人目がくる。両手は2人に向けたまま、姿勢もそらそうとはしない。相手から見れば絶好のチャンス。

しかし、相手は撃ってこない。いや、撃てない。足元に転がっていたスプレー缶を蹴り上げる。揮発性が極めて高く、ガスをしっかりと抜かないで捨てるとうみ収集車の中で燃焼してしまうと言う、きわめて危ないものだ。それが自分に向かって飛んでくる。もちろん撃ち落す事なんてできない。どうにか引き金を引かずにはすみ、スプレー缶を払いのけ再び照準を合わすが女性の姿はすでにない。

それと同時に急に部屋の中が静かになる。

「まさか!？」

「そう、そのまさかだよ。残念だったなあおい。」

ぐお!? こめかみで急に音が鳴る。肉が焼けるような。同時に激しい痛みが襲ってきて驚き飛び退くが、散らばった家具に足を取られて倒れてしまう。

遅れて気が付いたが、熱を持った銃口の部分を押し当てられたのだ

ろう。

体制を持ち直そうとすると、腕を蹴られ拳銃が音を立てて床を滑る。さっきまでの騒ぎがまるで夢であったかのように当たりはひどく静まり返っている。高所であるため都会の騒音も入ってこない。

「事件の裏には更なる裏があるのか。そうだよなあ、こんなガキだけで島に茶々入れられるはずが無いもんなあ。誰に雇われている？」

しかし、質問は途中でさえぎられる。

「聞きてえこたあ、後々聞きにいく。今はせいぜえ警察にばくられてな。」

奇跡的な静寂をぶち破るように人の気配が押し寄せてくる。

「警察だ。除装しろ。」

身を守るために、防弾チョッキや盾を下げて機動隊がドンドン部屋に入ってきた。

声が響くと同時に彼女は走る。どこにも逃げ場は無いと言うのに。窓に向かって発砲し、窓ガラスを破ってそのまま外へと飛び出す。狂ったのか！？ここを何階だと思ってるんだ。発砲を聞きつけ警官がドンドン押し寄せてくる。俺の姿を見つけるとすぐに押さえつけようとしてくる。何もできずただ立っていると攻撃の意思が無いことが伝わり取り押さえられ引つ張られる。仲間を2人やられたが、殺した本人は正体を隠すために自害した。微妙なところだが2人の仇を取れたと思うと、生きていることともに妙に勝ち誇った気になった。

その刹那、突風が吹き荒れ、その勝利の味は敗北の味へと変わった。へりだど！？まったく音がしなかったぞ。

風圧に耐え目を凝らしてみると、なんと無音のへりにはあの女性が乗っていた。なんともいえないような達成感に浸かったような顔をしてこちらを見下していた。

ひとつ分かった。いくら高額だといったからって、島のいざこざに

巻き込まれたらどうしようもない。
奴は、奴らはバケモノだ。

肩をがちり固定され、轟先生の病院を後にする。

あの調子だとしばらく怜火は、帰ってこれないか。なんというか、ドンマイ。

日が落ちて少し冷えてきたことを肌を感じ取り、自分が薄着だったことに気づく。

肌寒いし、そろそろ帰るか。

もう一度病院を振り返る。やっぱりどう見てもただの廃ビルだ。よくもまあこんな所ばかり選ぶのだろうか。いくら考えても理解できない事だと悟りその場を後にする。

「つよ。」

少し申し訳ない感じで、ぱぶっツパーの扉に手をかける。
返事は返ってこない。

そりゃあ怒ってるよな。

恐る恐るカウンターに向かう。

「あ、あのさあ三月・・・」

「あんたは自分が何したか分かってんの。自治団の仕事の邪魔して、拳句の果てに腕斬られて。幸い目をつけられてなかったから良かったものの。生きたいんじゃないの？死にたいの？もう、なんなの。」

なんて言えいいのか分からない。気の利いたことなんていえないだ。だから心に浮かんた言葉をそのまま述べる。

「心配してくれて、ありがと。」

「卑怯よ」

そこで、何も言わなかったり、逆ギレでもしてくれれば、こつちだつてもっと怒れたのに。

最後にぼさつと呟いたそれは何か聞き取れなかった。

心配させたんだ。今更ことの重大さと、周りの人にかけて迷惑に気付く。

心から心配させたのか。心配してくれる人がいるのか。

「ん、これ。」

サンドウィッチとコーヒーがカウンターに置かれる。ついでに封筒も。

「謝るのなら、私だけじゃないでしょ。それ食べたならそこに書いてあるところに行つて。」

いつも通りの匂いに手を伸ばし、口に運ぶ。

「やつぱりうまいな。」

「・・・お粗末さま。」

パシン。軽い音を立てて手を合わせる。

「もう、心配させないで。」

同意の意味を込めて軽く手を振り店を出る。

封筒を明けて中身を確認する。目指すは港。

日はほとんど暮れかけ、あたり一面はオレンジ色に染まっていた。

人はこれを見ると、黄昏などの感傷を覚えるらしい。

確かに日が暮れると、その日の終わりを寂しいや切なさと感じるが、

それは夜を休める時間だと思える人だけだ。

忙しい人はこれから、まだ働かないといけない。という、ある意味憂鬱を感じるだろう。

うん。こう考えてみると夕暮れ間近の時間帯は、確かに感傷的になる時間だ。

そんなことを考えながら港を目指して急ぐ。

アリの手伝い。

再びざつと用紙に目を通す。

詳しくはかかれてはいないが十分内容をつかむことはできる。

俺達のせいでもう、向こうには戻れないからな。ここで生きるために、色々けりをつけることがあるんだろ。

あたりの景色がだんだん物寂しくなり、見える建物は倉庫ばかりだ。

「アリ。」

壁に寄りかかる人物に声をかける。

「詩焉！？どうしてここに？」

「よく分からないが、手伝いだ。」

本当に何も知られていないのは確かだ。

でも、おおよその理由は分かっってしまうが、黙っておく。

「・・・そうか。帰れって言っても帰らないよな。」

「もちろんだ。せつかくここまで来たんだからな。」

そうは言ったものの、今のお前を見ると本当何しかすか分からない。なんていうことはできない。

「来たみたいだ。行こう。」

コネのある漁師さんをわざわざ呼び出して船を出してもらった。

朝早くから漁に出て、本来なら今は寝てるはずだ。そこところは本当に申し訳ないと思ってるし感謝している。

船に乗り込むと颯爽と水上を駆け走り始めた。

あたりに響くのは、船のエンジン音と船が掻き分ける水しぶきの音だけだ。

ある意味静寂な空気があたりに広まる。

バッグからイヤホンを取り出そうか迷う。

この静かな空気を避けるために音楽を聴くことはなぜかアリの存在を否定してしまいうさだ。

音楽を聴けばこの空気から逃れられるが、困っているアリを見捨てるような気がしてしまう。

どうしようもなく、諦めてそのまま真っ暗な海を見つめる。

見た目はよくないが、しっかりとしたレーダーやソナーを積んでいるため真っ暗でも静かな海ならそれらだけ見ていても十分渡れる。夜の海は本当に暗い。

地上のように家庭の光がないので、星や月がよく見える。

あいにくなことに、正座の名前なんてぜんぜん知らないから星を見てもせいぜい綺麗としか表現できない。

いつも見ているはずなのに、浅瀬から沖に來ると海は豹変する。

そこを見ようと海を覗き込むが、本当に何も見えない。

まるで闇の中を動いてるようだ。しかし、ほんの僅かに、僅かに夜空の光が海に照らし出されていて浅瀬では見れない一面を見せてくれる。

まあこんなに揺れなければ見てみたいものだ。

「酔ったかな。」

ちよつとだ、ちよつとだけ気持ち悪い。

船に揺られておよそ2時間どうにか陸へ戻ることができた。

これからどうしようかと考えながら倉庫ばかりの辺りを見回すと、1台のワゴンがこちらに向かってくる。

「ウィルシアから紹介された運び屋だ。さっさと乗れ。」

流石の一言につきる。

単に俺に知らされていなかったからかもしれないが、完璧のタイミングで事は進んでいる。

それにいい人選だ。

ちゃんと自分の仕事を弁えている人を選んでくれた。

いちいちこちらに首を突っ込んでこない。しっかりプロと呼ばれる人たちの第1条件をクリアしている。

静かな雰囲気のまま車に揺られることおよそ1時間。

よく写真で見るような閑静な高級住宅街へ連れてこられた。しかも

中でも一番広くて立派な家のすこし手前に。

こんな所になにがあるんだ？誰が住んでいるんだ？

「俺の仕事はここまでだ。後ろに荷物が積んである。」

「・・・分かった。」

「あ・・・おい、アリ。」

自分の準備を済ませ、後ろの荷物をもてるだけ持つとさっさと行ってしまう。

ひとつは脚立のようなものが束ねられていて、もうひとつは縦横およそ20cmほどの正方形の電子機器。

スピーカー？

いや、違う。

住宅街であることと、ここが「島」でないことを考えるとノイズキヤンセリング機能を持ったものだろう。

警察に通報されたら元も子もない。事は荒立てずに進めたい。

脚立の部分にはめ込み家の周りに設置していく。

ちやうど全て接したとき電話になる。

「・・・俺だ。」

イヤホンをつけて俺にも話の内容が聞こえるように片方をかしてくれる。

「時間通りね。」

どうやら電話の相手は三月らしい。仕事用の声で淡々と言葉を述べていく、とても冷たくて色のない声で。

「設置も終わったそうだから、もう行ってもいいわよ。警備会社と地域に設置してある監視カメラの心配はしなくていい。それに、いつも家に出入りしてる家政婦さんは、こっちからの情報で今の所見当違いの場所で待機してるわ。・・・アリ、後は話した通りよ。」

「詩焉の言う通り本当にすごいらしいな。」

「言うほどじゃないわ。そのバカも聞いているでしょ。よく聞きなさいよ。責任持って2人で帰ってきなさい、いいわね。」

そうして電話は一方的にかかってきて、一方的に切られる。最後の

一言だけは声に人間らしい色があつた気がした。

「ほんじゃあまあ、行きますか。」

「待て、詩焉。まず、話さないといけないことがある。いろいろ分かつてると思うが、俺は日本人の捨て子だ。それで、その親が今ここに住んでる。」

「復讐か？」

「分からない。でも、今は何かしないといけないんだと思う。だから・・・」

「まあ会えばいいさ。あわなければ事は進まないが、あえば事が進むだろうに。」

詩焉達が店を出て、しばらくして。

「家族構成は、父親の大神 誠一郎48歳。母親・・・この家族の母親は京子45歳。長男の誠司17歳。長女の清実16歳。父親は大手会社の専務で、政治界につてがある黒い噂の絶えない人物ね。今の結婚もたぶん政治的な意味を含めての物よ。」

淡々と述べられた家族構成の中には、もちろん俺の名前はなかった。

「この家族？」

「その写真の女性は今井 いまい のぞみ 希愛人 きあい のような18年前、あなたが生まれた年に亡くなってるわ。」

今の会話を聞いてなんとなく予想はついた。

つまり、「俺達」は邪魔だったんだ。策略結婚を行うためには過去の汚点となる愛人とその子供なんて存在してはいけなかった。だから、わざわざ海外まで来て、海外の中でも特に危険なところに来て事故に見せかけて俺達を殺したんだ。

明確な悪がようやく形成されてきた。

しかし、この怒りを単純に殺しという行為に持っていった方がいいのか分からない。

「場所は分かつてるのか？」

「運び屋に手配してあるからそこは任せて。」

この短時間でよく整えてくれたと感心しながらプリントに目を通す。

精密に組み立てられた作戦はすごいものだ。

できることなら、こういう作戦をしたかった。

あんな単純でとてもじゃないが作戦と呼べないようなものとは大違いだ。

「こんなこと言える立場じゃないけど、ここからはアリ、あなた次第よ。もし、殺してしまっても私は全力であなたを守る。けど、その後を生きるのはあなただって事を忘れないで。」

吹く風が、今だ今だと促すように身体を押す。

いくら周りを固めたからと言って、完全に音が漏れないわけじゃないし、こうしている間にも人目につくかもしれない。

風に促されるように歩き出す。

「どうする？正面から死に別れた父親に会いに来ましたなんて言っても入れてくれないだろ。」

悪戯云々相手にすらされないだろう。下手すれば変質者に間違われて警察沙汰だ。

「できるだけ目立ちたくはないからな。」

外側から見ると、下の階のリビングと思われるところを含め光はあまり多くはない。

1階は皆の集まる場所なので、人がいなくとも自然と付いていてもおかしくはない。そう考えると2階か。手持ちの荷物からワイヤーを取り出し上がろうとするが、アリに止められる。

「こんな時間帯でも、人目につく可能性はあるから屋根を歩くのはまずいだろ。」

そう言つて通りを歩き家の裏に回る。

確かにここなら他の家からは外壁が邪魔になつて見えないうが、カギが閉まつてゐる。

三月から渡された衛星通信型の薄型ディスプレイに目を通して確認する。

今はセキュリティ会社の方でカギが閉まつてゐるかまで、全てを管理しているのでそちらを戦略してしまえば簡単に個人情報へたどり着くことができる。

流石にここで爆破なんてできない。

「三月を信じる。」

花壇にある植木鉢を窓にぶち込んだ。

しかし、割れたのは鉢だけ。

「防弾ガラスだな。急がないと家の人が来るぞ。」

「そうだな。」

そう言つてゐる間にカーテンが開く。

「ちよつと貴方達何をやってるんですか!？」

そういうことか。簡単に納得する。

「失礼。」

「ちよ、ちよつと警察呼ぶわよ。ま、待ちなさい。」

「すいませぬね。ちよつと黙つててもらつていいですか?」

殺意のかけらもなく銃口を向ける。ここが島なら、相手は黙ることなく逆にこちらを襲つてくるだろう。

しかし、ここは一般人が銃を持たない平和な国だ。向けられただけで蛇ににらまれたかえるのように固まつてしまう。

「騒がなければ何もしない。父親はどこにいる?」

口をパクパクさせながら震える指で上を指す。

「お子さんは?」

「お母さん、今の音何?」

叫ばれる前に銃口を向けて黙らせる。いちいちうるさいな。こつちに殺意がないことぐらい感じられないのか。平和ボケすぎると、心

の中で悪態を付きつつもその平和にあこがれる。決してとどかないと分かっているが。

「喚かなければ何もしないから。」

「こっちは任せたぞ。」

そう言つて上に上がっていく。

ある意味上は修羅場だな。そう思いながら冷たい視線と戦いながら無言の部屋で静かに待つ。心のそこから思ふ、やめてくれと。

階段を一步一步上がるたびに緊張と不安が入り混じった感覚が体中を支配しようと足元から忍び寄ってくる。

また一步一步身体が支配されかける。

ここまで来て気持ちはまだ整理されてない。

階段を上がると、そこには広い廊下が広がっていた。

この家の大きさにはふさわしいだろう。

お屋敷の廊下を端から見渡すと、ひとつドアの下の際から光が差し出ていた。

あそこか。

そこに向かって歩き出す。

「だあああ。」

暗く誰もいないと思っていたドアから急に誰かが飛び出てきた。

右からの拳を重心を左後ろに倒し左の拳を重心を右後ろに倒しながら後退し最後に思いつきり頭を下げて、蹴りをよける。

どうにか全て避けきったが、どれも鋭すぎる。

格闘技の経験者か。

距離を取って一息つく。

少し厄介だが。

こちらが動こうという隙を見せて動きをさそう。

うち、のってこないか。それを見破れるほどの腕を持つ相手なのか、それともそれが分からない程度なのか。

考えてるうちに、再び襲ってくる。

周りの助けに頼らないということは、俺を一人で倒す自信があるのか。

なめてるな。

襲ってきた勢いのまま、足をすくって投げ飛ばす。

そのまま振り向きもしないで、明かりのついている部屋へ向かう。

「おい、誠司。少し静かにしろ。家ではあまりうるさくするなといったるだろ。」

「悪いな、人違いだ。」

「逃げて父さん。」

書斎らしき部屋には1人の男がいすに座っていた。

振り向いた姿は恐怖と加齢によって写真の男とは別人に見えるが、やはりコイツだ。

「くそやろおがぁ。」

再び襲ってくるが、同じように勢いを殺さず投げ飛ばす。

投げられた身体がそのまま本棚にぶつかり、一気に本が雪崩れ落ちる。

本に埋もれたことを確認すると再び目を戻す。

「大丈夫か誠司。」

駆け寄る男をつかんで引き寄せる。

「あんたは自分の心配をしている。」

「な、何が目的だ。こんなこととして私が話すと思っているのか。逆効果だよ。痺れを切らしたのがまずかったな。こんな問題起こせば、もうあんた達はおしまいだ。私は絶対にはなさ・・・」

思いっきりぶん殴る。自分の手が痛くなるほど。

「そんなことどうでもいい。俺が知りたいことは18年前の事だ。

あんたがどこで、だれと、なにを、どうしたかだ。答える。」

質問の口調が厳しくなり、息が乱れる。

「18年前?・・・そんなことまで嗅ぎつけたのか。しかし、そんなスキャンダルでは私を降ろすことしかできないぞ。私は、何も話

さないし、私の代わり……」

「この顔を見てまだ、思い出さないか。」

ようやく分かったのが、信じられない事実。顔をゆがめ、体中に変な汗を浮かべ始めた。

息をするのもままならないのか、目を見開き激しく動揺している。

本当に幽霊でも見たようだ。

「そんなはずがない。確かにあの時。そうだあの時確かに。助かる見込みなんてなかったはず。生き残る見込みなんてなかったはず。こんなことが。ありえない。ありえない。ありえない。ありえない。だろ。」

「父……さん？」

崩れ落ちた父を見て思わず声を上げる。

「誠司、こいつを見るな。汚らしい。見るな。見るな。見るんじやない。」

狂ったように声を上げて子供を怒鳴り倒す。

「話してないか。話してないに決まってるよな。いいじゃねえか。来いよ。」

銃を突きつけ階段をさす。

「や、やめてくれ。家族には、家族には言わないでくれ。金なら払う。一生遊んで暮らせるだけの金だ。身分証も作ってやる。そうすれば、この安全な国で暮らせるだろ。な、な、これでどうだ?」

「家族には関係ないか。おい、オヤジの事が大切なら下に行け。」

突きつけられた銃に怯え、さっきまでの勢いは全て消えた。

ドアを閉め密室を作り出す。

「話せ。」

「もう20年前のことだ。彼女と知り合って私達はすぐに恋に落ちた。しかし、その後すぐに親の紹介で政治的な意味を含めた結婚をすることになった。当然私は反対した。しかし、父は私ではなく彼女を陥れようとした。それで、2年の猶予を貰い・・・彼女と別れ

た。」

顔を思いつきり平手打ちする。流石に、2度も本気で殴りたくない。

「正直に話せよ。邪魔だから殺したんだろ。一時の快樂のためだろ。あんたみたいなお坊ちゃんが、そこら辺の女と結婚できる訳がないよな。」

壊れたように笑い出す。もう、壊れているのかもしれない。

「・・・そうだよ。本当にお前らは邪魔だった。特にお前だ。お前なんかができなければ、あいつも俺にしつこくしてこなかった。せつかく金をやるから離れろといつても、くっついてきやがるし、本当に邪魔だったよ。しつこく付いてこなければ、殺されることもなかったのに。そうだ、お前も怨むならあの女を怨むんだな。あいつがしつこくなければ、今頃お前も平和に暮らせていたさ。」

「そうか。」

今までの不安は何であつたのだろうか。

急に重荷が解けた。

ここまでの悪なら何も心配することはなかった。

もう一度同じ手で思いつきりぶん殴る。

大の大人が吹っ飛び、受身も取れないまま倒れこむ。

痛いこととかは、もう、どうでもいい。

もう、どうでもいい。

どうでも良くなった。

扉を開け、気の抜けた足取りで階段を下りる。

「あんたら悪かったな。特にあんた。・・・じゃあ、帰るか詩焉。」

今度はせつかくだから正面玄関から出る。

「電話はしばらく使えないんで。あと、できたら通報はしてほしくないんで、宜しく願います。」

詩焉がおかしなことを言っているのも分かっているのだが、相手にできない。

「使わなくて良かったな。」

ふと気づくと、まだ手に銃を握り締めていた。

「どうだった？」

「なんか、本当にどうでもよくなった。」

「そーか。」

少し安心した。多分言葉では説明できないだけで、心の中では色々整理できたんだろうに。

ちょうどいいタイミングで車がこちらに向かってくる。

流石三月だ。

エピローグ

入り組んだ路地を走る。

人気のない場所特有のくもった臭いが鼻を刺す。

息は乱れ、足はふらつき身体と心が苦情を訴える。しかし、一時のために将来を捨てるわけにはいかない。まだここで終わるわけには行かない。

諦めずさらに突き進む。

ひとつ向こうの大きな通りでは、色とりどりの屋台が並び、もうひとつの通りでは、今日を生き抜くために人々が他人を騙し、陥れている。

アンバランス。しかし、崩れてはいない。崩れようとしてもしていない。アンバランスな均等。矛盾を抱えながら、そんな島はあり続ける。そして、そんな矛盾を抱える島に住む人々は整ったかのようなアンバランスを持つ。

そんなところに俺は仲間入りした。

踏みしめるのは地面ではなく、ゴミ、識別不能の汚れ。そして、人の心。

それらを踏みしめて、薄暗い路地を突き進む。

急に立ち止まり、無線を取って連絡をする。

「詩焉悪い、見失った。」

「こっちで確認した。どうにかしてここまで来てくれ。っじゃ」

「っておい。」

一方的に切られてしまった。まあ走りながらなら仕方ないか。それにまだ、片腕も治りきってないし。再び路地に目を戻す。

今までこう言う建物が密集したところにはほとんど来たことがないので、細い路地を行き来されるとしんどいのだ。

方向感覚を全部持っていける気がする。いや、実際持っていけれ

てるだろう。

迷いながらも、道を突き進む。

たぶん、今来た道をもう一度戻れといわれたら無理だろう。
出鱈目に進むと、向こう側から騒がしい音がする。

あつちか。急いで足を向ける。

広い空間が目の前に広がると、詩焉の声が聞こえてくる。

「アリ、ソイツだ。」

俺にかまわず全力で走ってくる。眼中にないのかどうなのか。とにかくいらつとした。

走ってきた相手を、その勢いで投げ飛ばす。

大きく弧を描いて、思いつきり地面に叩きつけられる。

投げた本人ではあるが、かなり痛そうだ。

肺にたまった空気が思いつきり出て声にならない声が飛び出す。

「お手柄ー。合気道か、うまいな。」

「まあ俺らみたいな奴らが生き延びるのには力不足だからな。相
手の力でも利用しないと有効撃を出せないし。」

話しながら腕を後ろに回して縛りあげる。

「それよりコイツは何したんだ？」

「さあな。俺らみたいな下っ端には関係ないことだとき。まあ聞いて
わざわざいざこざに巻き込まれるよりはましだな。」

よく分からないという表情を浮かべて困惑しているが、無理にでも
理解してもらわないといけない。

やれと言われた仕事を、文句言わずにやるのが下請け屋だ。

「確かにな。」

「あー運び屋さんですか？先ほど連絡を入れてたものなんですけど・
・はい。・・・はい。場所は前の所とは少し違うんですけど。・・・
はい。ではよろしくお願いします。入金済ましておいありますの
で、後はよろしくお願いします。はい。毎度毎度すいません。では。」

縛り終えて待っていたアリが立ち上がる。

「なあ詩焉。俺はここでやってけるか？この手は血で真つ赤に染まってるんだ。狙撃兵として血で染めたんだ。そんな俺が、ここでやってけるのか？殺さずの世界で。」

狙撃兵。普通の一般兵は自分を守るために、威嚇の意味を込めて銃を撃つ。しかし狙撃兵は自分の明確な意思で敵を撃つ。

同じ撃つでも重みが、意味が違う。

「知らんさ。」

本心からそう思う。べつにどうでもいいから言ってるわけでない。こついうときは、変な助言はしないほうがましなんだと俺は考える。

「それはお前が決めることだ。」

「簡単に言っなよ。」

「それとも・・・手が真つ赤なら洗えばいいさ。過去は忘れて、これからのことを考える。と、でも言えばいいか？」

ふざけ半分で意見する。

やはり、何も言わないほうが人のためになるだろう。

肩を軽く叩いて三月の元へ報告をしに向かう。

「つま、なるようになるさ。善くも悪くもな。とにかく、帰ろう。」

「・・・帰るか。」

新しい家へ。

また、俺の周りで変化が起きた。

今度も俺の中ではかなり大きなことだったが、島にしてみれば良くあることですまされてしまう程度の事だ。

この島をめぐる争いは多分終わらない。

究極の自由。悪の世界。無法地帯。

そんな世界をほしがらない人はないだろう。

ああいうテロリストは多い。今回みたいに直接かわったことはないが、何かの思想に動かされたものは多く、その大半が消えてしま

っている。

人は何故思想というものを追い求めるのか。

分らない事だらけだ。

適当な道を通つてすこし遠回りしながら三月の店に向かう。ちゃんとしたわけがあつてだ。

少しでも早くアリにこの島になれてもらうため。土地勘をつけてもらうためだ。

「悪いな。ちよつと用事があつてな。あとから向かうよ。」

「分かつたよ。ご苦労さん。」

そう言つて適当なところで別れると適当にスタスタと店を目指す。

俺も個人で仕事を取るように、アリもアリで仕事を取ってるんだろ
う。全てを三月に任せてはいけない。

さて、気を直してドアを開ける。

「いらつしゃーい。」

「あら、遅かつたわね。」

いつもの店の空気だ。変わらずあり続けてくれるそこはありがたい。

「いつもの、運び屋さんに連絡入れといたから大丈夫だと思う。」

「ええ、今連絡着たわ。」

自称おれの席へと腰掛けるといつも通りに三月がサンドウィッチと
コーヒーを出してくれる。

「うまいな。」

「お粗末さま。」

最後の口直しにコーヒーを飲んでひと時を楽しむ。

「詩焉さん。」

「れ、怜火。なんか怖いんだけど。」

簡単にあらわそうなら体から黒いオーラがあふれ出ている。
ヤヴァい感じがする。

「どーして私をおいて一人置いて言っちゃうんですか。それに2人
で危ないことしてるし。」

「いや、轟先生ってあーなったら止まらないし。」

「だからってこういうことしていいと思ってるんですか？ だいたい詩焉さんは・・・」

「まあまあーちゃん。詩焉は後でしごけばいいし。それより仕事。奥のテーブルからオーダー取ってきて。」

うーと言って、顔を真つ赤にしながら怒って向こうに行ってしまう。あーあー、怒らしちゃったな。

「謝るときなさいよ。」

「分かってるよ。」

報告も終えたし、サンドウィッチも食べたことだし席を立つ。

「怜火、おつかれ。それと、ごめんな。」

自分のできる限り、恥ずかしくない限りの笑顔で怜火に話しかける。謝罪の意を込めて。

店を出ると、数週間前の暑さは嘘のようになくなり今はもう寒い。

季節の変化、周りの変化。実感できてるようで、できてない。

実感したくない。

周りが変わってしまうことを、自分が自分でなくなってしまうことを。

だから、もう少しだけこのまま、このままで行きたい。

我が身考えず突っ込むバカでいたい。

吹いた風が後ろ髪を引っ張る。

柄にもないことを考える。夕日が綺麗だった。

島のどこかに彼らはいる。

実態なき組織。島の自治団。島を守るために彼らはいる。

優れた情報網で島の全てを管理し、害虫の侵入を防ぎ、事前につぶす。

はずだった。

「どういふことか説明してもらおうか。」

男はただ黙る。女達は武器を構える。どこにでもありそうなオフィスは戦場となっていた。

テレビでは某国のマンションでガス爆発があり、周辺住人に被害はなかったという報道が流れていた。

「世界トップレベルの安全な国でもこういう事件はあるんだなあ。」
それを事故ではなく事件といってる時点で彼女の言いたいことはあらかた分かった。

さらに、その場所まで加われれば明らかだ。

「喋らなくてもいい。私達は知りたいことを全部知っている。」
黙っていれば助かると思ったが、自分の命が本当に消されると気づきようやく口を開く。

「ま、待て貴様ら。私はこの地区の管理を任されているんだぞ。わ私がいなくなったらどうなると思ってるんだ。」

あきれたように二人は顔を見合す。

「無能なクズが1人いなくなるだけだ。」

突きつけられた銃がさらに強く押し当てられ、刀は首筋に当てられ今にもその猛威を振るいそうだ。

「話す。話すから。」

諦めたような手振りを見せながら、机に手を置くように見せかけて引き出しから銃を取り出し構える。

しかし、目の前には人影がなかった。
な!?

そう思ったときには、すでに腕が痛み銃が後ろに飛んでいた。

拾いにイスから転げ落ち、手を伸ばす。

「ぎゅああああああ」

「私達相手に銃を抜いたのか。愚弄してるのか?」

刀に腕を串刺しにされ、絶叫する。何の恥じらいもなくただ叫ぶ。

「ブーブーうるせえ豚だな。丸焼きにすんぞ。ああ?」

「ひいひいひいひい。や、やめてくれ。ど、どうだ。俺と協力すれば好きなだけ好きなことをできる暮らしができるぞ。」

「てめえみてえなクソ野郎は、ぶつ殺してえがな、腐ってもてめえは自治団の1人だ。残念だが一生むしょだ。」

自分の理想像を壊されておかしくなったか急に笑い出す。リアルから逃げ出したか。受け止められなくなったか。

「お前達は何も知らない。我々は・・・」
「つううう。」

最後に何か言おうとして、消し飛んだ。
本当に消し飛んだのだ。

「夜花、大丈夫か？」

「ああ。まさか自決？」

「あの豚にそんな度胸はねえだろ。最後までなんか捨てセリフ言おうとしてたし。」

部屋が血でまみれたその後すぐ連絡が入った。

「・・・さっきの参考人が消された。」

「向こうでか!？」

ことは違い向こうでは犯罪者を法以外で裁くことはできない。

「今回は厄介な敵がいるみたいだな。」

そこは島の外。

現実「リアル」

「いやあゝ危ない危ない。危つく私達のことを話されるところでしたよ。」

「いいのか？唯一のパイプじゃないのか？」

「ですが、彼は捨て駒です。それにパイプは少ないほうがこちらも安全だ。それよりそっちは大丈夫ですか？向こうを消すほうが大変でしょう。」

「なに、事故死にでも見せかけることは、案外簡単だ。」

「それは、怖いですね。新聞で読む事故死が本当なのか疑いたくなりますよ。」

「それは良い心がけだ、世間は常に疑ってかからないと、こちらは

すぐに騙される。用心しろよ。」

「では、お互いの利害のために。」

そう言って電話を切る。

なんとしても、あの島を手に入れたい。そのためには何でもする。新たに他の電話を取り出し、連絡を入れる。

「私だ。次の計画は進んでいるか？」

敵は大きかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0829j/>

BAD WORK2

2010年10月8日23時49分発行